新潟工科大学研究紀要　第18号　2013年12月

ミン妃暗殺事件の謎と構造

判 澤 純 太＊

（平成２５年１０月３１日 受理）

The Enigma of Min-bi Assassination

Junta HANZAWA＊

After having passed a hundred years and more, an woman in a photo who had been thought as was the queen of Korea has been found she wasn't. She was attempted terrorism attack by her father in law named Daewon-kun in the early morning of October 8th in 1895, after the queen named Min-bi abruptly disappeared herself in the history of Korea, how and what was the case ?

Key word: Min-bi assassination

はじめに

心底から憎らしい閔妃を庶人の身分に貶めてやらなければ、大院君に澱の様に染み付いている恨みの心は晴らしよう筈がなかった。

１８９４年7月２７日、幽閉中の雲峴宮（大院君の私邸）から大鳥啓介公使に出馬を要請され、王宮に侵入した日本軍を後ろ盾にして、大院君は第４次になる執政を復活させた。

しかし、大院君の心が日本に靡いた訳では決して無かった事を、朝鮮近代史を理解しようとする上で必ず留保しなくてはならない。大院君と日本は、日清戦争の直前に双方が偶々利害を一致させたに過ぎなかった。

日本は対清開戦策の名分を必要としたし、大院君は内政制覇を考えていた。

大院君は、甲申事件以来隆盛を誇っている閔氏派の支配（勢道政治）を何とか転覆させたいと企って大島義昌将軍に協力したのであった。一方陸奥宗光・外相、川上操六・参謀次長、大島（義昌〈中将〉）将軍（川上操六・参謀次長の直系）たちは、日清戦争を始めようとして、その為の「大義名分」に大院君を必要とし、協力を要請した。

翌９５年１０月１１日、国王・高宗の詔勅は閔妃を廃后に処した。閔妃が庶人の位に落されたのは、「乙未事件」（閔妃殺害事件）の翌１２日の事であった。だが、１１月２５日アメリカ公使館内で開かれた「列国代表会議」（米〈フート公使〉・露〈ヴェーベル代理公使〉がその中心にいる）が、閔妃の廃后撤回、復位を要求した。

その２日後に、米・露（スペエル Aleksey・ N ・de Speier）公使らが教唆して、２７日夜半に「春生門事件」（国王の王宮逃亡事件）を起こしたが、それは未遂に終わった。

＊国際関係論（環境科学科） 教授

朝鮮政治へ「逆介入」を、米露両国が試みている。閔妃の服喪（死亡確認）が発表されたのは１２月５日であった。朝鮮国王は、後に、９７年１１月２２日、事件のほとぼりが冷めた頃である２年後に、閔妃に明成皇后の謚号を贈った。

朝鮮国王は、１９０７年、英親王・垠（厳尚宮〈その出身は両班階級ではない〉の息子）を８月７日に皇太子に冊封し、一方８月２７日に拓（閔妃の息子）を純宗皇帝として、慶運宮で即位させた。ところが、純宗は見るからに病弱で子供が出来無い体質であったから、閔妃の血脈はこうして、以後、朝鮮王室から断たれた。

上の９５年１１月２５日、「米露公使（貞洞）会議」は合せて、軍部大臣・趙義淵、内閣総署（官房長官）、警務使〈警察庁長官〉・権栄鎮の２人を名指し、国王に罷免要求を提出するとも決議した。同決議を１０月１３日政権（第４次金宏集内閣）は、その実体が大院君による「第５次執政」の施行に他ならないと見なして非難した。尚、更迭要求を受けた２人は、「第５次執政」期での武力機関の担当者たちである。 又、貞洞派（米露外交街）は「乙未事件」クー・デター陰謀計画の容疑者群に対して、更なる追求指弾を準備していた。

その指名手配を逃れようとして、俞吉濬（総理総署：代理総理）、趙義淵（軍相）、張博（法相）の大院君派代表３人は、こぞって日本に亡命しなければならなかった。

しかしながら、趙義淵グループ、朴泳孝グループのその後を追跡しようとする歴史学の分析視点は、なぜだか朝鮮研究の分野からそれ以後ほぼ立ち消えてしまった。代って、三浦梧楼公使の動向ばかりを注目し三浦公使を乙未事件の首謀者に仕立てようと、歴史研究の焦点が専ら絞られる傾向に傾いた。その為もあってなのか？「乙未事件」分析そのものは、辻褄が合わないミステリアスな事件に益々変節してしまった感が否めない。

以上の大物（大院君派）３閣僚の逃亡は、９５年１０月１３日以降に、大院君と国王の間に、実の親子関係が今や修復し難い亀裂を生じさせている事をマザマザと公に露見させていた。3年後に、1ヶ月前の妻（国王の生母）の死の後を追う様にして亡くなる（９８・２・２３）大院君の寂しい葬儀に朝鮮国王がいっかな姿を見せなかった事や、又その１年前に、国王が閔妃に盛大な式典と共に謚号（明成皇后）を贈ったエピソード等が、大院君と国王の亀裂の深刻さを示唆する補強証拠に上がっている。

しかし、愛妻の閔妃の死を深く悼む朝鮮国王の迫真の素振りでも、一方、大院君が宮中に輿を乗り入れた「乙未（クー・デター）事件」の当座にあっては、国王が、果して閔妃を庇護し大院君（実父）の謀叛に対する抵抗者であったのか？という視点を我々が改めて確認しようと試みても、あらゆる状況証拠はそれを否定する。歴史追跡は朝鮮国王を、「大院君に対する抵抗者」であった、と見なす仮説を許さない。逆にむしろ、同クー・デター事件の「直前」に、朝鮮国王には大院君と結託する必要があった諸事情が明らかになる。換言すれば、国王の座を死守しようとばかり常に最大に脳中で考えている国王にとっては、大院君と結託する以外に、その願望は果たせなかったのである。

ところが、同乙未事件の「直後」に、国王と大院君の関係がたちまち決裂した事が、又、

史実の解明を厄介なものにしているのである。それでも我々は、「三浦首謀史観」をひとまず乗り越えて、以上の朝鮮近代史の歴史過程を改めて追いながら、「乙未事件」という謎多き事件の全体構造を解き明かす試みに入って行こう。

１．統衛大将・李埈熔

１８９４年７月、日本軍の朝鮮王宮への侵入に伴って、大院君が閔氏一族を皆、追放した事によって、それまで急速に権勢を盛り返しつつあった閔氏派は離散し、閔妃は王宮の中に１人孤立無援の状態に陥ったのであった。閔泳煥、閔応植、沈相薫、閔致憲等王妃が頼みにする主要閔氏派は、遠地に配流されてしまった。

井上馨の前々任者・大石正巳（弁理公使）が朝鮮政府が施行した「防穀令」（穀物の国外搬出暫定禁止令）に噛み付いて、ごり押しの賠償請求（９２・１２）１１万８，０００円を朝鮮政府に押し付けた事から、日朝関係は最悪の関係に陥っていた。しかも今は、ちょうど大鳥圭介（全権公使）は朝鮮勤務を北京駐在と兼務したのであり、それは、日本政府が未だ朝鮮を外交的に特段、重要視していない事をもろ出しに表していた。

大鳥公使はその後日清戦争に忙殺され、「軍国機務処」設立を以ってその任期を終えた。

私人・岡本柳之助を介して大鳥公使から要請を受けると大院君は、王宮（景福宮）で再登壇し、９４年７月２７日、第４次執政に着手した。その組閣人事を見ると、大院君は、李載元（大院君の従兄：甲申事件で左（領）議政〈首相〉、兵曹参判に任じた）と李載冕（大院君の長男：甲申事件で左賛成外務督弁）を中心に用いた。

李埈熔を王位継承者にしようと大院君が図った事が歴然である。

国家武力機関である親軍（朝鮮官軍：「７・２２改革」に５営を廃して、第１独立訓錬大隊〈当初２ヶ中隊〉として発足）に、大院君は最高責任者（９４・１０・７壮衛大将）に申箕善（甲申事件で吏曹判書兼私文提学）を任じ、又、８月１５日、孫の李埈熔を内部協弁（内務次官）兼親親軍・統衛大将として幕下に擁した[(1)]。地方官吏の任免は内部衙門の管轄であった。内部大臣・閔泳達を放逐して、李埈熔に内部衙門を握らせ、地方官吏の頂点に李埈熔を立たせる筋書きである。

軍国機務処を中心核とする新政府は、９４年７月２７日に成立した。前領議政（首相）・金炳始（２・２３「第１次日鮮議定書」調印）が辞表を奉呈し、判中枢府事・金宏集が議政府領議政に任じた。金宏集は軍機処会議（会議員１７名で構成）総裁をも兼ねる。

大院君がその次子たる王世子・拓、及び王妃・閔妃の両名を廃し、代って長子たる宮内府大臣・李載冕の子、李埈熔を次期王位に就けて、雲峴宮家の繁栄を末永く図ろうとしている事は、普く知れ渡っていた。軍機処当局が敏感に、９４年８月３日以降２回も李埈熔を会議員に入れたのも、一方には２５才の有能な李埈熔の才能を買ったのであったが、もう一方では、明らかに、それで大院君を牽制しようという意図があった[(2)]。

端的に言えば大院君は、未完の１０年前の「甲申事件」体制（それは金玉均が口火を切った）を復活完成させているのである。

李載元の任命には、前回（甲申事件）の時も同様だが、相変わらず名誉職として「名義貸し」という意味合いがあった。しかし、李浚熔をひっぱり出した事は、今後の朝鮮政局を睨み大変重い意味を込めていた。大院君の意図を忖度すれば、①大院君は李浚熔に次期朝鮮王位を引き継がせようとしており、かつ、②その父の李載冕（大院君の長男）を宮内府大臣に就け、宮廷財政（内帑金）を完全支配しようとした。

王太子・拓が母親（閔妃）が祖父（大院君）に殺されるかと脅えて、雲峴宮（大院君の私邸）を訪れて涙乍らに母の命乞いを祖母・閔氏に取り縋って繰り返したのは、この頃のエピソードである。閔妃は「中殿」に蟄伏した。ところが、閔妃は陰に回って、「軍国機務処」議員の買収取り込み工作に奔走した。

同９４年８月１５日に大鳥啓介公使が顧問として新設した「軍国機務処会議」（金宏集が総裁官に任：８・１５「第１次金宏集内閣」と並立制）は、内政、外交を１７人の議員の合議によって決定する国権最高機関であった。

（第１次）金宏集内閣に揃った顔触れを以下に掲げてみよう。尚、（　）内は、軍機処役職である。

①内部協弁・朴定陽、内部参議・朴準陽、②軍部協弁・趙義淵（壮衛使）、③法部協弁・金鶴羽（参議内部府事）、④外部協弁・金嘉鎮（同）、⑤宮内府協弁・金宗漢（内部協弁）、⑥警務使・安駉寿（右捕盗大将）、⑦権栄鎮（機器局督弁）、⑧兪吉浚（外部参議）、⑨張博（工曹〈度支 — つまり、財務〉参議）等が新世代である[(3)]。これに、所謂「両金１魚」（金宏集〈首相〉、金允植〈外相〉、魚允中〈度支相 — 財務相〉）と、申其善軍相を加える。

「軍国機務処」に求められた役割りは、専ら大院君の専制支配を牽制しようとする事に尽きた。その短い４ヶ月間の活動期間中に、「軍国機務処」は２０８件の新規改革法案を捌いて採択した。１２月２８日に組閣される第２次金宏集「改組」内閣へ繋ぐ試みであった。その間、兪吉浚、趙義淵、安駉寿、金嘉鎮、李浚熔等の、大院君派５人組が、新世代会議員として軍国機務処会議の中で世に名を挙げていた。

９４年７月２５日、豊山西南沖合いで連合艦隊第１艦隊東郷平八郎「浪速」艦長が、清国軍隊を満載して朝鮮半島に疾駆輸送する途中の英国輸送船を撃沈した。２日後に大院君の第４次執政がスタートしている。

８月１日、日本は清国に対して宣戦を正式に布告した。西太后が専ら自分の還暦祝賀行事しか念頭に無かった為に、清国が日清戦争に動員する事が出来た総兵力は、公称３５万人（歩兵８６２連隊、騎兵１９２連隊）を謳っていながらも、片方で、南方で清・仏緊張関係に手を割かなければならなかった事情もあって、陸上兵力１３５，０００人（盛軍〈天津駐屯〉７６，０００人、毅軍〈旅順駐屯〉２０，０００人、奉天軍４，０００人、奉天・吉林練軍１，５００人他）が精一杯の動員であった。一方、日本の陸軍総兵力は推計１２万人である。

日・清双方の海軍力を比較すると、清国が誇る北洋艦隊（７，５００ｔの甲鉄艦「定遠」、

「鎮遠」を中心とする）は、２２隻の主力戦艦５０，０００ｔで構成していた。日本の海軍力は、主力戦艦２８隻５７，０００ｔの備えである。清国軍が本拠地を置く平壌（ピョンヤン）が陥落した８月１７日に、日本海軍は僅か６時間余で黄海の制海権を握った。

８月６日、朴泳孝が「甲申事件」の罪を許されて、１０年ぶりに祖国の地を踏んだ。１５日、金宏集を首班として組閣された第１次内閣に対して、大鳥圭介公使が託された大事業を以下に掲げよう。

①７月２３日「日朝暫定合同条款」（又は、「大日本大朝鮮両国盟約」）の締結。その第１条規程によって、朝鮮政府は、日本軍へ、駐屯、兵站の為に糧食提供、電信線の架設許可他のあらゆる供与での協力を約した。京城－釜山、京城－仁川の鉄道敷設権と、全羅道沿岸の１港を日本が租借する事を許諾した。
②８月１０日「中央銀行の設立」。租税金納制度の導入（銀本位制の導入）。
③５００年の伝統を持つ６曹の行政制度を廃止し、近代的内閣制度に国家制度を改める。第１次金宏集内閣では８「衙門」制に（「第１次内政改革」）、第２次金宏集内閣では７「部」制（「第２次内政改革」）に改められた。

とりわけ項目②は、「内閣」制充実の観点からすると中心課題であったが、その意味は、宮廷費から（国家）行政費を画然と分離しようとする事にあった。金宏集総理（甲申事件の外部督弁）、魚允中財務相、金允植外相（甲申事件の外部協弁）の３俊英が、同第１次金弘集内閣の中心ポストを占め、朝鮮「内閣政治」の機能化に向けて取り組んでいた。

「内閣制」を朝鮮政治に拙速に定着させようと焦る日本政府は、大院君派の「崇華・衛正斥邪主義」政治への揺り戻しへ警戒心を緩めなかった。しかし、日本政府は、大院君の存在を疎かにする事も出来なかった。日本は、清国との会戦を、大院君が国王を介して日本側に要請したという外交的体裁を用いて、日清戦争に踏み切っていたからである。

９４年７月２５日、大鳥啓介・全権公使は景福宮（王宮）に、清国代理交渉・唐紹儀を招致して、大院君と朝鮮国王が立ち会う下で、「清・朝商民水陸貿易商程」と清・朝宗族関係の破棄と駐朝鮮・清国兵の即時撤収要求とを朝鮮国に宣告した。

７月２８日、陸奥宗光外相は大鳥公使に宛て（英文電報で）て、「（仁川金庫に）設置セル８万円ヲ配定シ、無利子デ朝鮮政府ノ借款ニ繰入レヨ」と指示した(4)。

さて、日本軍の「撤兵」問題を論じ、「時機」を視野に入れるならば、日本は、その国益を考慮すると、清国より必ず「後」に「撤兵」しなければならなかった。元勲・井上馨が、第２次伊藤内閣の内相職からわざわざ転じて降格扱いも厭わずに、自ら全権公使の職を買って出て９４年１０月２６日に漢城（ソウル）に着任した。

井上馨は、９２年１１月から９３年２月迄、伊藤博文が事故（皇居前でさる華族の娘の馬車と衝突した）致傷に遭いその治療中には代理総理も兼任した。又、井上は外相の任にあった時に金玉均を２年間遠島隔離処分に処したが、この事は閔妃に好感されよう。

井上馨は、１０年前に１８８５年1月９日、特命全権大使として「漢城条約」を締結した責任者である。日・清「漢城条約」は、「甲申事件」（大院君第２クー・デター）の決着を着けた条約であった。この条約によって、清国は日本に、数を明示しない日本軍隊の朝鮮駐留継続権を認めた。井上は、１８７６年「江華島条約」締結時には、全権副使であり（全権弁理公使は黒田清隆）、又、８２年「壬午事件」（大院君第１クー・デター）後の「済物甫条約」の締結時には外務卿の任にあった。つまり井上は、日本政府の中で対朝鮮外交の最高エキスパートの人物であったと見なせるのである。

したがって、井上馨は、朝鮮の外交、治政、財政３方面で活躍する、井上自身が個人的に良く知る金允植、金宏集、魚允中の、朝鮮政治３人衆が、溢れんばかりの才能と気概を以って、朝鮮に近代「内閣制」を導入出来ると、成功を確信していた。１０年前には、井上は、朝鮮国政からモルレンドルフを排除する仕事に奔走していた。モルレンドルフが去った１０年後に、井上は頼もしく感じられる３人と再会を期待した。

しかし着任早々に、井上は９４年１０月２６日、外部（務）大臣・金允植を、「第１次内政改革」の目玉である「軍国機務処」（議政府とも称する）に何ら実効が上っていない、事で譴責し、早急に「軍国機務処」を廃止せよ、と迫った。

井上は、８・１５「第１次内政改革」を、１２・２８「第２次内政改革」（第２次金宏集内閣と国王主導の「甲午大更張」の並立体制）へ移行させようと焦って考えていた。

尚、１０月８日、第３王子・義和君（母親は張尚宮）が、枢密顧問官・西園寺公望の慰問使節へ答礼報聘使の役目を担って、華麗に外交界へデヴューした。

１０月２８日、井上が国王に信任状を奉呈してから数日後の事であるが、大院君が私邸の雲峴宮（甲申事変以来事実上の軟禁状態下にいた）から孫の李浚熔を連れて、日本公使館をぶらりと訪ねて来たのであった。李浚熔は大院君の長男の李載冕の息子である。大院君は１０月２１日に政治引退を宣言していた。尚、その席でも、大院君は李浚熔と一緒である。

孫の李浚熔は雲峴宮で育ち、大院君は李浚熔を目の中に入れても痛くない位に溺愛している。そして大院君は井上と、翌９５年初から始まる１・７「第２次内政改革」（ポスト・「軍国機務処」体制）の構想について色々と話し合ったと思われるが、しかし、その会見での大院君の真の狙いは、井上と、そして井上から三浦梧楼に継続して仕える事にもなる、ベテランの杉村濬・１等書記官とに、統衛大将に就任した李浚熔本人を直接引き合わせようとした事にあった、と後世の私は推察するのである。

李浚熔は９４年１２月３１日に、駐日特命全権大使として赴任する事に内定していた。だが、井上は、李浚熔が今、朝鮮「政局」の中で（閔妃から）あまりにも大変危ない存在に見られていると直感していた。李浚熔本人が、大島前公使や杉村１等書記官にも、議政府（軍国機務処）内でも、閔泳煥、閔泳詔、李載純ら閔妃の取り巻き連中が危険な存在である、と、盛んに、無警戒に警告し回っている事実を、井上は聞き及んでいたからである。

井上は、李浚熔を１日も早く駐日公使に転出させ、朝鮮政治から引き離そうと試みた。

ところが李浚熔は、９５年１０月８日（「乙未事件」）迄その話を渋って頑として応じようとしなかった。しかしながら、結局、９５年１１月１１日、李浚熔は日本に、長く（１０年間）亡命（留学）する事になろう。

２．第２次金宏集内閣の形成

９４年１１月４日、国王が井上に謁見を許した。井上薫公使がその席で国王・高宗に奏上した話の要点は、次の２点であった。①「済物甫条約」取り決めの賠償金５０万円の内、残りの４０万円を朝鮮政府に寄付返還する事、②日銀が３００万円を朝鮮銀行に融資する事であった。井上はこれを機に、９４年１２月から９５年「７・１意見書」に至る迄、５００～６００万円の朝鮮公債起債を何とか成立させようと、懸命に奔走するのである。

だが驚くべき事であるが、当時の朝鮮には「歳計制度」なるものがそもそも存在しなかった。その事に驚いた財政顧問官・仁尾惟茂の緊急報告の引用によれば、朝鮮政府の「内帑金」分類以外の国家歳入は、仁川、釜山、元山３港からの関税（４０～６０万円）に限られていた。一方１８９６年度の国家会計は、歳入４，４６８，５８７円、歳出３，８０４，０１０円であった(5)。朝鮮政府国家財政は、当時は１年間約３００万円規模で運営されていた事がこれによって分かるのである。

そこで井上は、１８９５年度については、３００万円を「借款」（日銀融資）でどうにかこうか、財政費を捻出出来るであろう、と目算した。しかし、次に差し迫る１８９６年度については、それではどうなるのか？早くいえば、厳しく危なっかしい自転車操業状態である朝鮮財務を救済する他の手立ては誰にも無かった。なぜなら朝鮮財政の太い柱である「内帑金」ルートは、日清戦争で破壊され尽くして塞って見るも無惨であった。

ここで、９４年１１月４日時点の井上の謁見の場に話を戻そう。井上は国王・高宗の面前であるにもかかわらず、その父親・大院君への批判をあえて辛辣に、大音声でトウトウと弁じた（直後にすぐさまこのエピソードが朝鮮宮中に伝わると、井上の倣岸さ、国王をないがしろにする無礼さを、宮中の誰もが心の中に深く刻み込み、井上に対して抜き難い嫌悪感が朝鮮宮中に生まれた）。

ただし、閔妃１人だけは、この件によって、逆に、井上を信用したとも判断出来る。井上は大院君との絆を切る積もりだろう、「第２次金宏集内閣」（国王主導による「甲午大更張」と並立制）において、井上には大院君派の跳梁を許さない積もりがあり、井上は宮中を決して蔑ろにしない、と閔妃は、恐らく強く確信したのに違いなかった。

井上の政治改革指導は、１２・２８「第２次金宏集内閣」の樹立期に始まった。同内閣は、まず内閣官衙を８部（省）制から７部制に整理した。しかし、この意味を研究の外部者は、なかなか分かり難いかも知れない。そこで換言すれば、朝鮮ではそれ迄、それぞれの官衙が個別に徴税権を持っていたから、井上はそれらを徹底的に整理したのであった。これによって、「宮内府」の力が相対的に弱められ、近代税制を進める上で徴税権限が、度支部（財務省）１極に集中したのであった。

井上は「内閣制」の信奉者である。自身、内相の経験による自負もあった。しかし、第２次金宏集内閣下に一応理想的な「内閣」制度が樹立されると、それと同時並行的に、「甲午大更張」政策を執行させようとし、次に井上は一転して、「国王」を中心とする「単独指導」体制を、その上に重ねようと企ったのであった。そこでは井上は、確かに— 閔妃の推測の一面どうりに —、大院君派といささか距離を置こうとしたのであった。だが、井上が重視しようとする「宮廷」とは — 閔妃の「読み」の圏外で— 、国王中心（閔妃を排除する）による「単独指導」体制を志していたのであって、井上には、閔妃、閔氏派とも、同じく距離を置く意志があった。

しかしながら歴史を参照すれば、閔妃は、井上の第２弾政策（つまり、後半の政策）に、前半のみを視野に入れているから、井上が「宮中（国王）」『主』、「内閣」『従』に転換しつつあるのであれば、それならば、「宮中（閔妃）」『主』、内閣（閔氏戚族）」『従』への推移も、又、可能である筈だ、と読み取ったのであった。閔妃流の思考方法が、この点に差掛かってから大きく「変化」する事を、我々は留意しておく必要があるだろう。それ迄に閔妃は、「宮廷」（国王を閔妃が操る）を大きくし、「内閣」を小さくする事に意を用いて来たのだったが、ところが、「第２次金宏集内閣」以降の閔妃は、「内閣」制度を極力強化し（この点では井上と協力する）、しかし、その「内閣」を、「閔氏戚族」が乗っ取る方向に、政治「転轍手」として、政策方針を大胆に意趣変えしたのだった。

この様な政策路線切り替え（即ち、大院君派潰しに際限なしに過激化する）は、大院君と閔妃の対決を決定的にしたのであるが、反面、同時に、朝鮮国王と閔妃の心理的、政治的距離も引き離した。閔妃にとって国王は次第に、必ずしも必要でなくなった。しかし国王の方も、それを敏感に感じ取った。

井上は、国王の玉座の後ろの屏風（油紙障子？）の陰にいる閔妃が、聞き耳を立てている事を百も承知であった。９月に、山縣有朋・第１軍司令官が平壌の清国軍本営を陥落させた時に、大院君が密かに清軍に送っていた、清軍の対日戦に感謝し清軍を激励する内容の手紙を、陣中に置き忘れ物として発見し、それを束に括って井上に送っていた。

ところが、実は大院君だけでは無く、高宗と閔妃も大院君と同じく、清国の勝利を信じ、清国を激励する内容の手紙を、清軍の平壌（ピョンヤン）本陣宛てに送っていた。それも井上は山縣から束で受け取って、今回参内する際に一まとめにして鞄の中に入れていた。しかし井上は、それらの証拠物を、わざわざ謁見の席で取り出す必要をまったく感じなかった。後から人を介して差出人たちに返却してもらえば済む事である、と井上は考えた。

井上は、さもいきなり急に気配を察したかの様に装って、屏風の向こう側に控えている閔妃へ誘いかけた。閔妃は井上の大院君批判を聞いていたく満足した風であった。閔妃は思わず気を許して、屏風を半分だけ開きその姿の端を井上に垣間見せた。閔妃は、井上が閔氏一族の復権に期待を寄せてくれるか？と思って心弾ませた。

閔妃の何よりの関心事は、大院君に追放されていた閔泳駿（芝罘経由）、閔泳煥、閔応植、沈相薫、閔泳翊（北京）、閔商鎬〈芝罘〉、閔泳達（西江）らの有能官僚を一刻も早

く漢城（ソウル）に呼び戻し、９５・１・７「第２次内政改革」（第２次金宏集内閣期）を換骨奪胎し、閔氏派だけで固める事にあった。

閔妃の側近として他に挙げられる人々は、李範晋、李夏栄、李学均〈「侍衛隊」第１大隊長〉、玄興沢（「侍衛隊」連隊長）等である。閔妃は、それらの忠臣たちが続々と都（ソウル）に戻って来るなり「宮内特進官」なる新設職種に任じてヘリコプターの急上昇の如くに昇格させ、宮内府要職に就けてから、「内閣」から宮廷費を閔氏派が奪い返そうと狙った。閔氏派は、新しい徴税システムを地方各処に再建した。慶尚道においてその試みに重点的に着手している。もしそれらの試みが成功すれば、「宮中」（閔妃中心）は圧倒的な資金力を握れる。「内閣」の実権を閔氏派が完全に制する事が可能であろう。

９４年末に新しく発足した第２次金宏集「改造」内閣（９４・１２・２８組閣：大院君は１０・２１に引退声明した〈前述〉）に、誰もが驚いたのは無理も無い。８４年にかつて閔氏一族に弓を引きその皆殺しを謀った（甲申事件）筈の朴泳孝が、内部大臣兼副総理に堂々と地位を得て、同内閣に入閣したのであった。朴泳孝の政界登場は、閔妃の推薦による。

朴泳孝は8月６日に、許されて東京を出発し、仁川港に１０年ぶりに帰着したが、そこで朴を周到に出迎えたのは、かつての甲申事件の同志たちではなく、閔妃の側近の李駿弼である（李は大院君に銃殺される）。朴は9月２３日に入京（ソウル）して以来、閔妃の庇護の下で待機中であった。朴泳孝は、閔妃による思いもよらぬ破天荒な抜擢を受け入れて、自分が閔妃を篭絡したのではないか？と浅はかに過信した。一方閔妃は、大院君派内閣（第２次金宏集内閣）を叩き潰すに「手駒」を見事に釣り上げた、と考えたのに過ぎなかった。

「第２次金宏集内閣」に入閣した朴泳孝の鼻息は頗る荒い。そして「急進開化派」の手による「内閣」の乗っ取りを、朴は同志の徐光範法相と２人で、甘く夢想した。大院君派を打倒する目的であれば閔妃もそれを許容してくれるに違いないだろう、と、朴は次期総理を確信して錯覚してしまった。朴が小安洞に閔妃から与えられた邸宅は、宮殿の如くの壮麗な佇まいで、三清洞の閔泳駿宅と妍を競い、たちまち群小政客が門前市を形成した。

趙義淵・軍部大臣、俞吉濬・内閣総署（内閣書記官長：俞は９４・８・１５「第１次金宏集内閣」でも内閣総署の任にあった）、申箕善・工部大臣、安泗寿・度支（財務）部協弁（次官）、金嘉鎮・工部協弁等の大院君派の人々が、第２次金宏集内閣を代表する面々であった。それらを石塚英蔵（前・日本法制局長官）顧問が支えていた。

ただし、安駉寿・度支部協弁は、次の６月４日の朴定陽内閣の発足では、警務使（警察庁長官）に任用された事によって、閔氏派に鞍替え転向したと見なす。安駉寿は第２の「鞍替え朴泳孝」といえる存在である。安駉寿は、「急進開化派」としての扱いでなく、若手大院君派の中から、閔妃の策謀により引き抜かれている事に、注意を要する。安駉寿の配下には、警務副領・洪啓薫（「訓錬隊」連隊長：閔氏派）がいる。

安駉寿は、「乙未事件」直前の第３次金宏集内閣では、趙義淵に代って軍部大臣に任じ

た。安駉寿と洪啓薫は、その前に第３次金宏集内閣期下で、「侍衛隊」を嗾けて「訓錬隊」を相手に意図的な衝突騒ぎを何度も引き起こした。

戻れば、第２次金宏集内閣は、その他、金允植・外部大臣を留任させたまま、かつ３８才の李完用を駐米代理公使から外部協弁に迎えて、外交面のスマートさを宣伝する体裁も整えていた。「甲午大更張」の母体（プラットホーム）として、同・金第２次内閣は十全に機能するか？に窺われた。李完用の父である李镐俊は大院君と親交があり、又、趙大王大妃とも姻戚関係にあるが、ただし、李镐俊の妻＝李完用の母は閔氏の出身である。

３．「３国干渉」と朝鮮政治の変化

井上馨公使は、閔妃が、その強固な「侮清」・「抗清」主義を軸心にすれば、「内閣」を主とした上で、従たる「宮廷」で「国王専制」をサポートしつつ、「親日」路線に歩み寄ってくれまいか？とむしのいい期待を抱くところがあった。朝鮮の地に近代「内閣制度」を何としても定着させたいと考える井上馨であった。

９４年８月１５日、１６日、朝鮮国民の宇宙観がコペルニクス的に逆転した。よもや敗れることはあるまいと考えていた「上国」（宗主国の清国）が、「平攘大会戦」、「鴨緑江大溝会戦」に、アッサリと完膚無き迄に日本に敗れ去る姿をマザマザと見たのであった。ところが、９５年４月２３日の「３国干渉」、そしてその延長である、５月３０日の「遼東半島還付詔」発布を見ると、今度は、今迄の驚愕が、それ迄想像も出来なかった「侮日」の大津波に変化した。井上馨はそれを満身に浴びた。

井上は、閔妃が「津波」をその先頭で拡大している姿を発見した。尚、「３国干渉」は概念上だけのものでは無い。それは、仁川湾に、露、独、仏、英の艦隊が集結した上で、「３国武力干渉」を臭わせていたのである。「３国干渉」は、日本を威嚇すると共に、第２次金宏集内閣をも威嚇した。第２次金宏集内閣は６月を待たずに崩壊した。

清国が追加賠償金の庫平金３，０００万両（約４，５００万円）を９５年１１月１６日迄に追加支払いするならば、その日から３ヶ月以内に日本兵は遼東半島から撤兵する、と日本政府（第２次伊藤内閣）は公約した。

日本政府は帝国主義政策の一環として、清国に対して北緯４０度以南の遼東半島「割譲」と、台湾、及び澎湖諸島を冒険的に要求したが、程なく、前者が、特に列強から強い反発を買う事に気が付いた。露独仏３国は勿論であるが、意外にもイギリスがこれを嫌っている事を、日本政府は遅まきながら認識した。

イギリスだけが、清国東北（満州）に経済金融進出する強い意欲と卓然的資金力を有していた。「３国干渉」の後に露清銀行（仏資本）が翌年に設立される事になっても、帝政ロシアには、実のところ資本余力は無かった。イギリス以外に清国東北（満州）金融市場に投資能力を有する国は存在しなかった。イギリスは自他共に、金融力のその卓越性を認めていた。「３国干渉」を経験した日本の世論は、イギリスに対して日本の態度が軽率であり過ぎた事を反省した。日本政府は改めて、拳を振り上げなかった唯一の国（イギリス）

の存在に注目し直し、「日英同盟」の締結へ方途を探り始めたのであった。ただし、１９０２年に実現する「日英同盟」は、ロシア軍が一旦清国東３省に南下すれば、日本軍が「自動（対露）参戦」しなければならない条項を含めている。そうであれば、それ（同盟の締結）は日本にとって、国運を賭けた行為であった。

「３国干渉」に独帝（ウィルヘルム２世）だけがやけに熱心な態度であった。カイゼルは９７年に膠州湾を領有したい（９９ヶ年租借：ドイツはイギリスの威海衛活動を監視したいとツァーリに申し出た）野望に駆られて、従兄弟の露帝（ニコライ２世）と共同歩調を取った（なぜだか独帝は、英語書簡を送っている）。一方日本は、「３国干渉」の出現によって、イギリスの威海衛租借を支援する立場へ急旋回した。

ここから、後の歴史を先読みすれば、イギリスは「３国干渉」出現の次に、ロシアと交渉して、ロシアに、①北京－漢口線建設を諦めさせ、②北京－天津線と、北京－牛荘線の建設を放棄させている。①は英（独）露「揚子江協定」に至るし、②は、ロシアに、奉天－旅大線方向の建設を促している。イギリスは、②の政策によって、ロシアに北京乗り入れは絶対に許さない、との決意を示した（それが成功すれば、間接的にロシアの蒙彊鉄道建設〈アフガニスタンに抜ける〉を無用化できる）。他方、ロシアは、イギリスには清国東北に鉄道乗り入れさせないと決意を固めた。この様に、清国東３省（満州）で、イギリスは金融方面の活動のみに特化する事にし、ロシアは、イギリスの活動展開が他の事業に関る事を制限する事で両者は妥協合意したのであった。

英米の調停でやけに簡単に日清講和が纏まったのであり、李鴻章は列強に促されて、総計２億３，０００万両に上る対日賠償金を支払う為（１億円に付き７年間５分利付き）に、ベルリン、パリ、ロンドンの起債市場を空しく駆けずり回った。４列強国は積極的に応札しなかった。しかし、清国の借金漬け状態によって、東北市場への思い扉が想定外に造作も無く開かれる日を、列強は待望した。

日本は国家予算の約２年分に匹敵する賠償金（庫平銀２億両）を清国から獲得したけれども、そうであっても日清戦争の費用（台湾侵攻費を除く）を補填するには、まだまだ資金は到底足りなかった。第２次伊藤政府は、金融手詰まりを根本原因として機能半不全状態であった。９５年６月２日に台湾及び澎湖島の受け渡しがあり、６月４日に日本政府閣議は「６・４決議」を採択した。日本政府は今後の朝鮮政策を再検討し、「無為」を以って対処する事を決議したのであった。

この真意を、様々に詮索しようとする議論があるが、日本外交の黒幕である谷干城子爵が、「当分は防衛策で行くのがいい」と語った事が方針の総べてである。５月３１日付け『North China Herald』が、同言を上手に紹介している。

日本は日清戦争の９ヶ月間で１隻の軍艦も失わずに済んだが、すべての軍艦が大掛かりな修理を必要としていた。「３国干渉」の屈辱を経験して、日本は、第１級装甲艦を（対露戦）艦隊に揃えようと決意した。しかし、反面、歴史の示すところでは、帝政ロシアは、朝鮮半島を囲む自国の希に見る圧倒的に有利な軍事情勢を、これ以上対日本威圧に使おう

としなかった。それは、主としてウィッテの考えによっている。

３～４年後に予定どうりにシベリア鉄道（南部）支線が遼東半島先端の旅順・大連と繋がったならば、ロシアは何時でも好きな時に、朝鮮半島全領域に１０万人以上のロシア兵を迅速に移送する事が出来るのである。更にロシアの強みとして、９８年9月１０日付け『申報』は、旅順に駐屯するロシア陸軍勢力が、２５，０００人である事を報じている。

外相・陸奥宗光は台北が９５年６月７日に陥落した事を以って、西園寺公望・代理外相に後事を託して療養に専念した（半引退）。井上は後ろ髪を引かれる思いで同月７日に漢城（ソウル）を離れた（６・１１仁川出港）。井上の離朝前に、「雷（ラッパ：法螺吹き）公使」と綽名を付けた井上の帰国を惜しむと称して、閔妃は昌徳宮の演慶堂に3，０００人の来賓客を集めて、「独立（甲午大更張を指す）祭典」と名付ける送別会を開いた。

しかし、井上が去るやいなや朝鮮宮中に、閔妃が選任した、件（くだん）の「（宮中）特進官」が雲霞の如く徘徊した。閔泳煥、閔泳詔、閔応植、沈相薫、閔泳達等のメンバーである。閔妃が好む巫女なども宮殿を自由に出入りをし始めた。また、閔妃は、次に協弁差し替えに着手し、それよって、いよいよ４官衙（度支部〈財務〉、法部、工部、農商部）の支配を進めた。だがこの１策は、井上が７月２０日に帰朝（鮮）、復職すると宮廷に慌てて抗議を申し出て立ち消えさせた。

７月１９日、（山縣の卓然性を認めない、造反将軍）三浦梧楼（だが長州閥）が特命全権公使に任命された。一方７月２５日、井上は夫人・武子を同伴して国王と王妃に謁見した。井上は別れを暗喩して国王に6，０００円相当の礼物を、閔妃に3，０００円相当の宝物を贈った。三浦の朝鮮駐在が決まるのは8月１７日である。

閔妃は先に、６月４日に組閣される朴定陽内閣下において、魚允中（中立派）・度支部大臣と、農商工部大臣・金嘉鎮（朴定陽内閣閣内での唯一の大院君派大物）２人の追い落としを企てた。閔妃はその為に、旧来は法令上で６００人の規定である筈の宮内府官僚を、２，０００人に増員した。その連中が「特進官」として、「内閣」各部にコンバートされ、「内閣」を思う存分引っかき回したのであった。９５年初1月７日に朝鮮国王が中心に取り組んだ「甲午大更張」（後に説明する）によって徴税業務が度支部（財務省）の排他的管轄権限に固定された事を、閔妃は絶対に納得していなかった。

「甲午大更張」が齎した制度改革の結果、内部大臣（朴泳孝）の承認無しに徴税システムを改変する事が出来なくなった。これによって誰にでも分かる様に、朴泳孝内相は閔妃にとって目の前の瘤の存在になった。朝鮮の国政費は、度支部衙門を実質有名無実にする様にわざと複雑にしてあった。しかも、宮廷と行政の取り分比率は、年々、恒例の様に両者の政治綱引きの結果で大きく変わる仕組みである。

他方、７月１１日と３１日に、駐日露公使ヒトロヴォが、西園寺・代理外相を訪問している。高宗が直前に東京外務省に送達した対日「駐兵依頼書」（１ヶ大隊守備兵駐屯申請）の真偽を、東京外務省（西園寺代理外相）にロシアが照会する為であった。この事から見ても分かる様に、在東京ロシア公使ヒトロヴォの反応は「３国干渉」の前と同様に頗る早

かった。

井上が執筆した渾身の「7・1意見書」（追加融資300万円恵与最終上申）は、東京では極めて不評であった。8月17日、井上に本国から召喚命令が発された。

先に「6・14」西園寺（代理外相）内訓は、井上の500万円追加融資案を西園寺が陸奥宗光（外相）に代って却下していた。「採択は、来る帝国議会での承認を待って欲しい」、という形で、西園寺臨時外相は日本政府の決定を「7・11」回訓で井上に再度伝えていたのである(6)が、その意は紛れも無く「却下」である。井上は、「甲午大更張」の成否は、実に、追加借款300〜500万円の可否に掛かっている、と伊藤総理に繰り返して泣訴したが、8・25第3次金宏集内閣下で井上は万策が尽きた。

8月24日に宮内府協弁・金宗漢が、内閣改組（第3次金宏集内閣）によって更迭された。井上はこの人事によって、先んずる朴泳孝事件と合せて朝鮮宮内府と通ずる唯一のパイプを失っている。代りに米人チャールズ・リゼンドル（李善徳）が宮内府顧問に就任している。ちなみに、このリゼンドルはカルル・ウェーベル露代理公使の友人である。

国王と閔妃の2人が「乙未事件」直前に、一緒に屏風の陰へ篭った。国民への全ての告知は、屏風の裏から閔妃が囁き声でリゼンドルにまず伝えられ、それを更に李耕植が内閣へ伝えるようになったのである。

井上は未練げに幾度も滞在期間を遷延した末、夫人の武子を伴って仁川港を9月18日に後にした。井上馨が同郷（長州閥）の親族中から、選びに選んだ適任後継者（？）が、95年9月1日に漢城（ソウル）に着任する事になった、元・陸軍中将子爵（日露戦争当時の第1師団長、現・枢密顧問官）・三浦梧楼・全権公使であった。

4．三浦梧楼公使

（1）三浦・高井会談

「金剛山の坊さん」、「読経（三浦は観音経の読経と写経を日課とする）公使」、又は「猿顔」等の綽名を、閔妃は三浦梧楼に様々に付けた。三浦梧楼は、同郷の先輩高杉晋作の奇兵隊に投じてその身を起こし、会津戦争、西南の役等で次々と武勲を立てた類希な勇猛さ、山縣にも公然と対立する将軍として意固地さが世に広く知られたが、今更ながら、予備役の枢密顧問官という閑職から井上に発掘され、朝鮮公使に転じた。

着任早々の三浦公使は、井上馨・前公使時代の様な「内閣制度」の押し付けを捨てて、「宮廷尊重主義」を国王、閔妃にそれとなく臭わせた。三浦の特徴は、「甲午大更張」政策に何ら拘泥しない事であった。大院君の三浦への接触がいかにも素早かった。王位の安泰こそを最善の目標に考えている国王（前述）でさえも、三浦を必ずしも忌避すべき対象と見なさなかった事が後になってから分かる。

後追いで歴史を吟味し直すと、前任者の井上は「第2次金宏内閣」（①度支〈財務〉部への徴税権集中、②内部大臣〈宮内府大臣ではない〉による国税管理）がその任務であった事が判明する。次に三浦が唱えようとする新・「宮廷尊重」主義は、井上政策の第2弾

に他ならない。三浦は、閔氏戚族の「勢道政治」を転覆させる事に照準を合せていた。

閔妃と大院君の関係は、当面朝鮮政治において朴定陽内閣下では、閔氏派が圧倒的に優位を占め、両派の力関係に決定的格差があった（先んじる第２次金宏集内閣では、暫定的に両者は伏在的対決関係である）。日本軍の威信を担っているとの自己イメージがある三浦公使は、趙義淵派（大院君系：李周会、張博を挙げる）の「朝鮮官軍」（旧軍）と、日本「（在）朝鮮駐留軍」の間に（大院君を介して）意思疎通を図り、それによって、朝鮮官軍を閔氏派の手元から引き離す事が任務であった、と推測できる。

朝鮮官軍（旧軍）の中では、前任者の井上公使時代には、「内閣制度の尊重」と引き換え条件にして、日本公使が、官軍の解体（再編）を、閔妃に承諾するのではないか？と穿って見る警戒心が蔓延していた。国王も、「日本公使が閔妃と結託しない」、という１００％絶対の保証が無ければ、大院君とは接触し辛かったであろう。

三浦梧楼は１８７８年１２月参謀本部の設立と同時に西部監軍本部長を務め、とりわけ対露諜報人脈に近い。川上操六・参謀次長が、三浦を次期公使として了とする理由がそれであった。三浦は公使に着任直後に、９月２８日に、新納時亮・海軍少佐（９３年２月朝鮮公使館付武官に任）、楠瀬幸彦・陸軍中佐（９５年２月２３日に朝鮮軍事嚢門顧問〈９５・４から軍部顧問と改称〉に任）、高井敬義大佐・南部兵站監部長官（在仁川）、川村益直中佐・臨時南部兵站電信部長官（在漢城）の４人を、漢城（ソウル）公使館に即刻集合させた。楠瀬、高井から、三浦は元山、欝陵島、義州及び龍岩甫（両後者は鴨緑江の出口）等の最新軍事事情を聴取した、と私は推測する。

新納時亮少佐は、清国、朝鮮の兵要地理のスペシャリストであり、海軍と陸軍のリエゾンを担当していた。楠瀬幸彦・陸軍中佐は、ロシアの軍事情報分析の専門家である。楠瀬は、９２年４月にロシア公使館付武官になり、それから９４年１２月６日に、漢城（ソウル）公使館付兼任として、ソウルに着任している、特異な経歴を持っていた。

朝鮮官軍なるものは、陸軍主体の編成であった。５営（扈衛営、統衛営、壮衛営、総禦営、経理庁：総兵力約６，０００人）で基幹部分が編成されていた。他に各道郷兵、輜重兵、旗兵を合せて総数１０，０００～１６，０００人の兵力を擁しているといわれる。

ところが、驚くべき事に、統一指揮権が無かった。９４年「７．２２改革」は、５営を廃止し（前述：８８年に１度廃止されているが、失敗であった）、翌９５年２月２３日から「京城守備隊」（即ち、日本陸軍独立歩兵第１８連隊）によって「訓錬隊」の練成が開始された。

「京城守備隊」隊長に任じられたのは馬屋原務本少佐であった。東学党掃討を見た結果、朝鮮政府は、日本軍の近代武力の威嚇効果を認識し、この様な計画を立案した。

楠瀬は着任すると、朝鮮国王に「訓錬隊」を朝鮮８道に配置する計画を上申した。楠瀬は、その様な練成「新軍」を配置する為に最低６ヶ月は訓練期間が欲しい、と主張した。楠瀬案によれば、指揮は「道」毎に軍部大臣が選出する軍部参議が行う事になる。そして、それを更に、軍部協弁が中央から統括する組織に育てるという計画案であった。

新納や楠瀬は、ヴェーベル代理公使を介する閔妃とヒトロヴォ（Mikhail Hitrovo：在東京ロシア公使館全権公使１８９３・１・２８～１８９６・７・１２）の情報遣り取りを諜報する仕事を任務に含んでいたと推察しなければならない。その一方では、ウィッテの清国における動静も、彼ら２人は同時に視野に入れて、探索していた事だろう。

他方、三浦公使は、現地の人脈引継ぎに関しては、現地滞在１０年のヴェテラン外交官である杉村濬・１等書記官を頼るのであろう。

９月２２日、「川上操六（参謀次長）→伊藤博文（総理）」電[(7)]は、川上操六が、仁川の高井・兵站監部長官宛てに、三浦が日本駐屯守備軍の活動について、ある局面で馬屋原務本・守備隊長に「示唆」（命令ではない）を与える事を、高井、川村（電信部長官）両名に予め了承して欲しい旨を確認を取った。西園寺公望・代理外相発、外務省が川上のその訓令を承認する旨の報告も、２８日に、漢城（ソウル）公使館宛てに届いている。

高井・兵站監部長官は、①義州（後備歩兵第６連隊〈第２中隊欠〉：朝・清国境）、②仁川（後備歩兵第10連隊第１大隊、後備歩兵第１９大隊：朝鮮最大港）、③平攘（清国軍本営が置かれていた）、④元山（後備歩兵第６連隊第２中隊：ロシアが租借地に最も有利だと考える、ロシア極東海軍常態停泊用の不凍港）、⑤釜山、の５地点と、⑥「京城守備隊」（後備歩兵第18大隊〈２ヶ中隊〉）を、日清戦争後に未だ統括する役職であった。⑤と⑥は、軍制上大本営の直轄である。駐兵は総勢６，０００人と見積もられている。高井は、仁川の指揮処にいたから、ソウルの情勢には疎い。

川上操六・参謀次長は馬屋原務本「京城守備隊」隊長に、三浦の「示唆」を受ける振りをしても、飽くまで馬屋原が責任を担って軍規を遵守せよ、と命じている「状況」が、上の公電内容から判明する。

ところで、三浦梧楼公使（あるいは井上も含む）が閔妃殺害事件の首謀者だと主張する論者がいるが、三浦は同「クー・デター事件」に関与するに当たって、国王と王世子の存命（身体と地位の保証）を、最初から大院君に、絶対前提条件だとして提示した事実を、我々は再確認しなければならない（ただし、三浦は、閔妃の「処分」は言及しない）。

その様な前提条件ならば、「乙未クー・デター」後に、国王（高宗）はあい変わらず「在位」しているから、国王は（大院君も）、朝鮮国家の政策決定に「日本の干渉を（露・米と共に）徹底排除する」可能性を十分に確保しているのである（又、その朝鮮国王に唯一対抗できる朝鮮国内勢力は大院君であるが、大院君の「親日」誓約は当てにならない）。

事実、朝鮮国王は９６年２月１０日に「俄館播遷」を実行し、大院君勢力を今こそあからさまに排除しつつ、更にフリー・ハンドで翌年に、大韓帝国を樹立するのであった。

三浦梧楼が最初からこの様な条件を提示しているから、三浦主犯説の論者といえども三浦を、「三浦は、詰まる所馬鹿なのである」と最後は評価せざるを得ない。

「三浦主犯説」の論理は、空中分解している。

また、クー・デターの結果達成される国王単独専制によって、三浦は、①鉄道守備兵存置、と②電信確保、を策したと主張する論者がいるが、本当だろうか？検証してみる必要

がある。

（２）守備兵存置問題、電信線問題

（Ａ）　**「鉄道守備兵存置問題」**　井上は９５年４月２１日、朝鮮政府に日本守備軍の「永久駐屯許可権」を要求した。５月１２日「監軍・陸軍大臣兼務（大山巌陸相は出征中）山縣有朋→陸奥宗光（外相）」照会状[(8)]は、「日清戦争終結（５・８講和条約批准書交換）後、後備役を帰国解体し、常備軍中から１連隊を交代させたい」、と伊藤総理宛てに打診した。

陸奥宗光（外相）の回答は、「いま暫くそのまま据え置きしたい」、と伝える内容であった。５月１５日「陸奥→山縣」返信の中にそれが見える。６月２６日、井上は東京に一時帰国中であったが、ソウルの杉村書記官に、交渉報告は外務省暗号ではなく）今後は、内閣暗号を使え、と指示を出した。東京のヒトロヴォ露公使が俊敏に動き、情報を収集している事を井上は警戒している。

６月２９日、「（漢城（ソウル）に２中隊、釜山に１中隊、元山に１中隊、計４中隊を駐屯して欲しいという）駐兵依頼書」が、大君主（朝鮮国王）の諭旨を報じた金允植外相から東京外務省に公文形式で発せられた。それは金外相の署名があるのみであった。

この文書を、朴泳孝内相兼総理署理（副首相：朴定陽内閣）のイニシアチブ一存で発布したと推定する事は自然である。この為もあって、朴泳孝は「７・７政変」で失脚しなければならなかった。

ところで、ここでヒトロヴォが、煩いくらい頻繁に東京外務省に代理外相西園寺公望を訪ねに来ている。ちなみに、日本とロシアは、翌９６年５月１４日締結の「小村・ヴェーベル協定」（ソウル）によって、同案に合意するに至る。

９５年８月３日に、西園寺（代理外相）は、上の「金允植文書」に合意する旨の「駐兵承諾書」を金允植に対して送った。９月１２日、川上操六・参謀次長が、歩兵第１大隊の交代派遣と同時に、憲兵２５０人も追加派遣したい、と三浦公使に相談を持ち掛けた[(9)]。

憲兵の件については朝鮮政府の承認が必要である、と三浦は返答している。しかし、川上のこの案（１ヶ大隊〈３ヶ中隊〉＋憲兵２５０人）といえども、６・２９「依頼書」にある１ヶ大隊（４ヶ中隊）要請と、人数的にほぼ匹敵している（１ヶ中隊は約２００人）案であり、大きな変更点は無かった。

この憲兵隊１部差し替え案も、「小村・ヴェーベル合意」で、大泊５０人、可興５０人、その他ソウル－釜山間１０ヶ所に１０人ずつ配置案が日露合意を得ている。９５年９月１６日、「川上→三浦」電[(10)]は、「朝鮮各地に駐在する我兵の交代を徐々になす可き事」を合意した。９月２８日、西園寺代理外相と伊藤総理は、「守備兵交代（朝鮮内地への交代出兵制）の時機は、政府が熟慮する」と確認[(11)]し、その問題は決着した。

「3 国干渉」に狼狽した日本政府は、翌９６年「小村・ヴェーベル協定」、及び、それを下敷きにしている６月２８日締結「山縣・ロバノフ協定」によって、「日・露同時出兵」

規定が定まる迄、拱手傍観状態であった。日本は対露外交戦で、「３国干渉」以後、ヒトロヴォの掌中でまったく躍らされている。

９５年６月２０日山縣・陸奥連名宛て芳川顕正・司法相書簡中にある「ビ縫策ハ断然放棄シ決行ノ報芯ヲ採」るの意味推定は、２００５年１０月６日付け『朝鮮日報』が推定する解釈は間違っており、守備兵交代問題は粛々と進めて良い、と日本政府側（伊藤、陸奥、山縣、井上、大山）が、時間的猶予がある、と判断し、焦らず合意を形成したと解釈すべきである。

朝鮮国王は、９５年７月４日の杉村濬・１等書記官との会見で、「日本が総撤兵してしまうのは本当か？日本には１ヶ中隊は駐屯して欲しい」、と告げた。国王の発言は、決して朴泳孝に誑かされたという訳でなく、１ヶ中隊なぞ、いってみれば無きに等しいから、「名目数」だけは兵を残して、朴定陽内閣下の閣内の日・露両系勢力バランスを出来るなら保ちたいとする、国王「独自」の判断が表明された、と受け取る事が妥当、順当である。つまり、守備兵存置問題は、日本とロシアの間に決定的な利害衝突を起こさなかった、と総括したい。したがって、日本は本問題につき、ロシアの代言者であろうとする閔妃とも、衝突関係にはならなかった、というのが私の結論である。

９６年５月の「小村・ヴェーベル協定」で、日・露は同数の守備兵配置を認め合った。９６年６月「山縣・ロバノフ協定」は、駐留兵数を３ヶ中隊＋憲兵２００人づつ（各方総員１ヶ大隊規模）で合意した上で、「日露同時出兵」条項の規定に落ち着いた。ロシアは、「日本現存兵（協定許容数以外）の総撤退」を優先し、その為に、ロシアが「単独出兵しない」事を日本側に同・日露協定（山縣・ロバノフ協定）で約束して（ロシアは現実にはまだ駐留してはいない）、ロシアが日本側に大幅に譲歩したかに「ポーズ」を取った。

慎重な山縣有朋全権も、ロシアが「単独出兵しない」と空約束した事を満足しなければならなかった。それは日露の当時の軍事的な実力差を赤裸々に表している。日・露間の妥協内容を、ツァーリは、ニコライ戴冠式（５・３０）に同じく慶祝訪問使節を名目に訪露した閔泳駿には、朝鮮を疎んじた「ツァーリからの回答書」形式の文書として差し渡したが、その付属文書には、（朝鮮国建て直し策と称する）「４つの献策」を副えていた。

ところで、９７年には、ウィッテの構想によって、「清国東北地方＋全朝鮮一体化経営」大計画が、以下の様に動き出した（項目順不同）。

①９７年４月２２日、沈相薫・外相が締結した「朝・露密約」によって、ロシアは朝鮮国の軍事権を完全に握った。

②９７年１０月、アレクセーエフが度支部衙門顧問に就任した（６ヶ月間滞在）。ロシアは朝鮮国の財政権を握った。

③９７年１２月１８日、ロシア軍は旅順を占領した。前９６・３「李鴻章・パブロフ条約」によって、ロシアは旅大を２５年間租借した（同年、ドイツが９９ヶ年間膠州湾を租借し、９８年５月２４日、日本軍が、威海衛を撤兵する）。

④閔泳駿の訪露後に、ツァーリは、落魄の身の上の李鴻章を相手に、その後の北東アジア史の流れを決定づける２本の追加「条約」を結んだ。すなわち９６年５月「清・露同盟条約（秘密条約、１５ヶ年有効）」と、６月「清・露鉄道建設条約（秘密条約、８０ヶ年有効）」であった。

この２条約の締結によって、ロシアは、清国東北地方に、排他的（ロシアは、清国さえ排除しようとしている）鉄道網の建設利権を獲得した。一方李鴻章は、恭親王の登場によって、いよいよ追い詰められた。

（B）　**「電信線問題」**　却下通知を受け取ったが、井上馨が「電信条約締結ニ付上申」書（先に「７・１意見書」で、井上は、日本軍が架設した２本の通信線〈８８・７架設①漢城－釜山、９１・７架設②漢城－元山〉は有償返還、朝鮮の名義、清国資本の８５・１１架設・漢城〈ソウル〉－義州、８５・１１架設・漢城〈ソウル〉－仁川は無償返還という案を主張した）を再度西園寺代理外相に提出したのは、９５年８月２２日であった。それへ日本政府が下した結論は、同問題を「保留」にする指示であった。この問題も同じく、「山縣・ロバノフ協定」に持ち越されて調整されている。

ロシアは、「山縣・ロバノフ協定」第３条で、朝鮮から朝鮮政府が「名義」を有する（清国資本の）既設電信線を譲り受ける権利をわざと放棄した。ロシアは、電信線は自分の資金で国境接続新電線網として架設したい、と主張したのであった。ロシアは、日本が架設した電信線を借用する必要性を認めようとしなかった。

一方日本側の議論は、ロシアに朝鮮中の電線網を独占買収しようとする意欲も無いのであれば、日本軍が架設した電信線部分について、朝鮮側に有償譲渡する「金額算定」についてのみ、逡巡した。つまり、日本にとって朝鮮電信線返還問題と、返還金銭の問題に帰結する問題であり、ロシアと衝突する側面は無かった。

この様に検証して見るならば、「乙未事件」（閔妃殺害事件）の原因は、日本が「単独排他駐兵論」に執着した事でもなければ、又、日本が「電信線返還」を遅延させようとした事でもなかった事がハッキリと判明するのである。

溯って、先に８６年に起こった第２次「露朝密約事件」をきっかけに、北京駐在ロシア臨時公使ラデュジェンスキーが、天津で李鴻章と秘密交渉して、朝鮮半島に関る清・露の相互不可侵を合意した事実があった。これと同様の方式を、日本政府（山縣伯）は閔妃の頭越しにロシアと模索したのであった。

５．昇る太陽（閔妃派）と沈む月（大院君派）

（１）対大院君派攻撃の萌芽（金鶴羽暗殺事件）

９５年４月１日から６月末の朝鮮政府の歳入予算は３０余万円であった。６月から１２月末の見込みは４５万円である。その他人参税１５万円が別途加算される予定があり、し

たがって、９５年度総歳入予算は、１００万円が見積もられた。しかし、一方で歳出の方は4，４６８，５００円であった。その内３００万円については井上借款をあてがうとしても、残額５０万円を調達する当てが朝鮮政府には無かった。更に、予定外支出が８０万円あった(12)。

この内、５０万円は予備費から補填する事が可能であったが、９５年度に朝鮮政府は８０万円という絶対不足額を抱えていた。朝鮮宮廷は、９５年初に、５００万円の外債を起債して当面の財政手当てを図ろうとしたが、応ずる国が皆無であった。宮廷は外国人顧問の俸給支払いも５、６ヶ月遅延させてしまった。

先んじる９５年初１月７日、高宗は、「第２次内政改革」として「甲午大更張（改革）」誓約を発表し、自らを「大君主陛下」と呼ばせた。

高宗は「勢道政治」を改革すると公に誓った。同日、高宗は文武百官と王世子（拓）、大院君を率いて大廟（宗廟）に参拝し厳かに「大更張」の遂行を誓約した。また、高宗はそれに伴う具体項目として、「洪憲１４ヶ条」を宣布した。これは、李王開闢以来最初の「朝鮮国憲法」を国王が臣民の前に示したのであった。この時に高宗には、自分が近代「内閣制」の守護者であろうと、張り切って努めている様子が見て取れた。

朝鮮国王が挑んだ政治制度改革は、井上が企画した次の様な４つの段階を基にしていた。①閔氏戚族の「勢道支配」と決別する。②大院君から、最高政治支配権を納得ずくで引き継ぐ（①がその条件になっている）。③開明専制君主の指導で、近代「内閣制度」を突貫で樹立する）。④第２王子・拓（閔妃が生母である）を王位正統継承者として認める（閔妃〈王后陛下を名乗る〉が、①を認める事に対する取り引き条件である）。

「大更張」（朝鮮版の明治維新）の主要改革項目は、①清国との条約関係を一切廃棄する。②清国と同一の年号を使用しない（光緒→建陽）。③両班、中人、常民、奴婢の４社会階級身分差別制度を廃止する、④内閣制度の導入（領議制から総理大臣制へ）。⑤国家中央銀行設立、等であった。また、その他項目には、科挙制度の廃止、裁判制度の近代化、残酷な刑罰の禁止、種痘接種の義務化、早婚禁止、阿片吸引習慣の禁止、陽暦の採用等が入っていた。

ところが、この様な急進的改革項目を連発する「甲午大更張」の実施は、当然といえば当然なのであるが、既得権益にしがみ付き足掻こうとする旧両班層から、総スカンを食らう結果を齎した。高宗はその結果、４面楚歌の政治状況の中に沈んで、孤立した。

反面、井上馨公使は、９５年初に得意満面の顔つきで悦に入っていた。９５年3月３０日に、井上が日銀と朝鮮政府の間で３００万円の借款契約を胸を張って成立させたのは、下関で伊藤博文と李鴻章の間に「日清講和会議」が進行している最中の事であった。しかし井上９５「７・１意見書」（追加の３００万円の恵与）を、西園寺代理外相の「７・１１回訓」が事実上「凍結」した。朝鮮の財務内容が、あまりにも芳しくない為であった。

9月５日「西園寺→三浦」電(13)を見ると、逓信、陸軍両相と予め諮った上で、あらためて三浦が井上に、追加融資は諦めなければならないと諭すように、と、西園寺・代理外

相が、第２次伊藤内閣の方針を伝えている。

閔妃は、ロシアを頼みの綱だと信じたが、ロシアでは朝鮮の事は満州の周辺事に過ぎない、と関心が薄かった。清国東北地方（満州）に桁違いの投資を行おうとすれば、それを実行できる能力を有している国はイギリスだけ、ロシアにはその資金力が無かった。

１８９５年４月２３日、露仏独「３国干渉」（露公使ヒトロヴォが中心に推進し、独公使ゲート、仏公使アルマンをさそった申し出による）が、５月３０日、「遼東半島還付に関わる天皇詔勅」の発布を導いた。朝鮮半島をめぐる国際政治のパワー・バランスが一変する大事態であった。第２次金宏集内閣がその大津波の間に、５月１９日に、一気に瓦解した。５月２８日、後継内閣の首班は、前学部大臣・朴定陽（軍国機務処副総裁官）であった。閔妃と大院君の関係が、後戻りができない最後の死闘に入った。９４年１２月９日、軍国機務処と承政院が廃止されて中枢院が代りに設置された事によって、井上公使の宮廷監視力が弱まった事が、その直接的契機であった。

９４年１０月３０日夜、磚洞の自宅で法部協弁・金鶴羽が変死した事は、大院君派雲峴宮幕僚連の大規模な逮捕、殺戮劇の幕開けに過ぎなかった。とりあえず、金鶴羽が大院君擁立クー・デターを画策したが仲間割れで殺害された、という、取って付けたような噂が流された。

この事件を口実にして、大院君派の李泰容（議政府都憲）、朴準陽（内務参議）、高宗柱、田東錫、崔亨植らが連座し、絞首刑台に送られた。次には、翌９５年「４・１８事件」（「李竣熔逮捕事件」）が導かれる予兆があった。

中でも、在満州日本軍への慰問使として出かけていた旅中の若き有能な廉直朴準陽将軍がその用務先から急にソウルに呼び戻されて、ろくな審理も受けられないまま、即座に処刑された、見るからに理不尽な惨（むご）いこのエピソードは、閔妃への憎悪と恐怖とを人々の心に深く刻んだ。翌９５年初にかけて、許武、李会正、任応準、趙秉昌、趙采夏、李源進、趙宇熙、李載晩等の将軍が死罪に問われた。凄まじい大院君派の凋落ぶりを見る。

裁きを言い渡す法部大臣の職にいたのは、閔氏派ではなくて、甲申事変の逆賊・徐光範であった。閔妃の支持を得ていると勝手に勘違いしてしまった内部大臣・朴泳孝、徐光範が閔氏派と結託していた。「甲午大更張」の裏で、閔氏戚族は太陽の様に昇り、大院君派は落月の様だと世に評された。

９５年３月５日、大院君の執事・全国善が金鶴羽事件の教唆者として雲峴宮（大院君の私邸）内で逮捕された。この執事が口を割った事にされて、いよいよ２５才の李竣熔に、例の如くに「廃位陰謀」の容疑がかけられたのであった。次期総理になると自他共が認めていた内相朴泳孝（第２次金宏集内閣）が積極的に裁判を指揮した。

９４年１２月２１日組閣第２次金宏集内閣に内部大臣（兼署理〈副総理〉）の座を射止めた朴泳孝は、「急進開化派内閣」勢力による内閣の乗っ取りを目論んだ。アレヨ、アレヨという間に出世してしまう自分に、朴泳孝は己惚れて目が眩んでいた。朴泳孝は、閔妃が、朝鮮に「内閣制」を樹立する熱烈な支持者であるかに、安易に盲信したが、閔妃は飽

く迄「戚族内閣」支配体制を隆盛させる事が望みであったに過ぎなかった。

９５年５月２１日勅令は、「訓錬隊」を６ヶ大隊（５，０００人）に拡大再編するべく命を下した。しかし、同命令は直前の１８日に起こった趙義淵陸相更迭事件の影響によってすぐさま撤回され、「訓錬隊」４ヶ大隊、「侍衛隊」２ヶ大隊案に代えられた。「閔氏戚族派」が、朴泳孝が拡大「訓錬隊」を動員して大規模軍事クー・デターを実行しまいか？と予め警戒して牽制した、と見て取れるのであった。

９５年６月２３日、朴泳孝・留任内相が、アレクセーエフを招聘しようと企む「侍衛隊」を、王室警護から更迭しなければならない、と国王に激しく噛み付いた。「侍衛隊」（米人退役陸軍大尉ウィリアム・マッコイ・ダイ〈通称ジェネラル・ダイ〉軍部顧問指揮）は国王の「私兵」である。王宮警護は「訓錬隊」４（当面は２・５）、「侍衛隊」２の、５大隊で担われるべき新体制であった。

一方、６・４朴定陽内閣は、金宏集・前首相（中立派）、魚允中・前度支部大臣（中立派）、申箕善・前工部大臣（大院君派）を「中枢院」に封じ込めた。朴泳孝は、朴定陽内閣の誕生祝の日である５月１８日に起こった趙義淵軍相免職を早くも見てとるや、その独特の政治嗅覚で、我が身に危機が及ぶ雰囲気を即座に鋭く感知した。

さて、大院君は壬午事件から１３年間をかけて、乙未事件に至る迄に４件のクー・デターを実行して来たのであったが（その内１つは、９４年７月に大島将軍の強要によるものである）、一方雌虎（閔妃）は、９５年前半の何と僅か半年の間に、大虎（大院君）と同数のカウンター・クーデターを、集約的に打ち返して行くのであった。閔妃の驚くべきバイタリティーに、我々は今更でも舌を巻く他はない。

（２）李浚熔拘束事件（閔妃第１次カウンター・クー・デター）

９５年４月１８日夜、雲峴宮から李浚熔（２６才）が拘引され、国王（高宗）に対する廃位謀叛の罪で「権設（特別）裁判所」に送られ死刑判決が下された。時に法部大臣は徐光範（急進開化派）、協弁・李在正（閔氏派）、刑事局長・張博（大院君派：「乙未事件」直後、内部大臣代理に任）であり、各派の混成起訴チーム（内部に急進開化派〈すなわち、朴泳孝＋徐光範派〉と大院君派の衝突がある）である。

「特別法廷」の死刑判決は法的に厳正な処分だと内外に大宣伝したのは、前９４年１１月に朝鮮法部特別司法顧問に就任したばかりの星亨であった。しかし、井上馨公使の助命奔走が効を奏して、朝鮮国王から「恩赦」が連布され、９５年５月３日に李浚熔は終身流刑に処された。次に、５月１４日に刑期が１０年間に減刑され、喬桐府に収容される事になった。

星亨・法部顧問官に対する貞洞外交界の人物評価は、９５年１２月３日の『フランクフルター・ツァイトゥング』紙評に代表的に表されていよう。星に他意は無いと見て取っている。「第２次内政改革」（甲午大更張）が司法権と行政権を分離しようとしている事に星は渾身協力しようとする姿勢を貫いた。

星亨は根っからの「自由党員」である。若い頃当時の兵庫県知事・陸奥宗光に気に入られて大学南校大阪分校少助教就職に面倒見を受けて、遂には星亨は衆議院議長にも栄達した。陸奥外相がその就任から１年をかけて中田敬義とデュソンに作らせた不平等条約改正案が第５議会で「弱腰外交だ」と非難を浴び、星亨は陸奥の片腕だと見なされて不信任動議を提出され、衆議院議長から追い落とされた。

星は主観では徐光範・法部大臣の法務改革を側面援護しており、近代ヨーロッパ「法システム」の効用を何とか朝鮮の朝野に知らしめよう、と考える他に、英国法 barrister 称号を持つ星は、天性法律的な人物で他意は無い。だが、星亨の法厳格主義に基づく言動は、剛直さが無礼と受け取られ、一言一句が朝鮮中を震撼させた。ところで、星亨の観察は、①国王と閔妃を１行動単位として結託関係があるとみなしていたり、かつ、②朴泳孝、徐光範等急進開化派が閔氏派と連繫している、とみなしている。

「恩赦」の顛末は、高宗が思いがけずも生まれて始めて、実父の大院君に決定的な「恩」を売った。この裁判の経緯によって、閔妃の高宗に対する操縦性がいきなり翳った。その分だけ国王と大院君の間に、意思疎通のチャンネルが開けた事を推し測れる。

李竣熔は大院君の最愛の孫であり、大院君の長男・李載冕の息子である。李竣熔の突然の逮捕に狼狽した大院君は、妻と２人で慌てて王宮（景福宮）に駆けつけ、あられもなく慟哭しながら、国王が座っている椅子の前の床に身を投げ出し、ひたすらひれ伏して、何度も愛孫の為に、命乞いの嘆願を声を限りに繰り返した。

大院君は孫の刑が確定した後に、間もなく無性に李竣熔に会いたくなって、１人密かに雲峴宮を抜け出して、喬桐島を目指し漢江の渡し場迄辿り着いたのであったが、運悪く追手の捕吏に捕らまえられてしまった。その後、大院君は、孔徳里の我笑亭と自虐的に皮肉な名に名付けているボロ屋敷に蟄居した。

ところが、漢江沿いの１寒村孔徳里は、漢城（ソウル）から１里のさ程遠くない場所である。そこに何と！高宗から８月２０日に特赦を受けた李竣熔が、その父親（大院君の長男）李載冕と転げ込んで、大院君夫人さえも人目を忍びながら住み着いてしまった。

（３）趙義淵軍相の更迭（閔妃第２次カウンター・クー・デター）

安駉寿（第２次金宏集内閣度支部協弁：大院君派）は９５年２月に、「訓錬隊」が創設されると早々に、大（連？）隊長に任ぜられた申泰休の参領（少佐）昇格人事に噛み付いた。この事件が、趙義淵・陸相を陥れようと謀る、閔氏派による難癖付けの始まりの狼煙であった。閔氏派が露骨に「訓錬隊」を解体しようとしている。

安駉寿はその功績（？）によって、「7月7日」（朴泳孝失脚）後に、度支協弁（第２次金宏集内閣）から警務使（警察庁長官：朴定陽内閣）に栄転した。これによって安駉寿は閔氏派に鞍替えしたと見て良いのである。尚、警務副領には洪啓薫（「訓錬隊」連隊長に新任）が任じられた。こうして、「乙未事件」（閔妃殺害事件）を前に、閔氏派は王宮警備に、「安－洪警護体制」（閔氏派）を作り上げていた。

趙義淵（第２次金宏集内閣軍相）は、前９４年７月２７日大院君第４次執政期に大院君（第１次金宏集内閣）を雲峴宮から引き出した人物であった。９５年５月１１日、趙義淵は、（日本軍に対する感謝訪問である）「楊州特使派遣」問題を罪に問われた。趙義淵は、国王の勅許と内部大臣（朴泳孝）の承認を得ずに軍事使節を勝手に動かした、と閔氏派から馬鹿げた言いがかりを付けられた。或いは官軍の軍服のデザインを勝手に代えた、とも微細な問題を突っつく執拗な非難が加えられた。

９５年５月１８日、趙義淵は失脚した。第２次金宏集内閣は、趙義淵という絶大な軍事的後ろ盾を失って、金宏集首相が辞表を出さざるを得なくなった。魚允中、金允植も後に続いた為に、同内閣は９５年５月１９日総辞職した。

９５年５月２６日付け「井上→陸奥」電は、「閔妃が３国干渉に勢いづいて、第２次金宏集内閣（９４・１２・１７組閣）を瓦解（９５・５・１９）させる引き金として、この趙軍相の更迭問題を引き起こした」、と朝鮮政局を分析している。正鵠を得ている。

（４）閔妃第３次カウンター・クー・デター（朴泳孝内相の放逐、及び元山・欝陵島への露兵の上陸事件）

『North China Herald』１８９５年６月７日付け記事は、同月の朝鮮（朴定陽内閣）の政局焦点を以下の様に報じた。

「陰謀や干渉は今後一切慎むと誓ったと伝えられる閔妃が再び実権を握りつつある。彼女の影響力に最初に屈した１人が内部大臣（第２次金宏集内閣）・朴泳孝で、日本は彼の友情を些か買い被り過ぎていた。朴泳孝は井上伯爵を陥れる陰謀を企てていただけではなく、事実上ロシアの侵入に門戸を開く役割を果たしているといわれている 」。又、同記事はいう。「朴泳孝はもう１人の井上伯爵支持者である趙義淵陸相を裏切って、軍部（訓錬隊＋朝鮮官軍）を掌握しようとしたらしい」、と。

警戒心の足りない朴泳孝は自ら「内閣派」を自認していた。「６・４両朴競覇（朴定陽）内閣」（朴泳孝内相兼総理署理〈副総理〉、朴定陽学部大臣〈前・軍国機務処副総裁〉）下に、朴泳孝内相は７月３日、全国を２３府（行政区）に分け、それぞれに観察使（行政官）を配置し、又その下の単位である邑（郷村）も群として、各群に群守を置いた。簡単に見て、内部大臣の独裁体制であり、徴税権が内部大臣に集中的に集まる仕組みにしている。

錦陵尉（李王朝第２５代・粛宗の女婿）・朴泳孝は能天気にも、自分は閔妃の寵愛を一身に受けて、当然次期内閣組閣では総理に就任し、それによって、急進開化派内閣が朴（泳孝）・徐（光範法相）２頭体制の花を開かせられると思い込んでいた。朴泳孝は先王粛宗の娘を妻にしていたが、妻に先立たれて独身貴族になった為、今はどんな閔氏の嫁候補の娘とでも選び放題に結婚することが可能であるから、そうなれば次期朝鮮国王の座すら視野に入ると悦に入っていたのであった。

６・４組閣朴定陽内閣下では、朴泳孝、徐光範の他に、金嘉鎮・農工商部大臣、李完用・

学部大臣、李尹用・警務使（警察長官）にも、閔氏派から引き抜きが掛けられていた。李尹用は「７・７政変」（朴泳孝失脚事件）で同じく更迭され、度支部協弁・安駉寿がその後に警務使に移った。安駉寿には次の８・２５「第３次金宏集内閣」で軍部大臣の席が用意されている。李尹用は、同第３次金宏集内閣で警務使職に戻った（閔氏派に転向？）。李完用は、第３次金宏集内閣でも学部大臣に残っていた（閔氏派に転向？）。

「朴泳孝の失脚（「７・７政変」）によって、（朴定陽内閣下に）閔妃は指を鳴らすだけでどんな反対でも押し込められる地位を得た。１６人の全員が閔妃派である高官を新しく（政府に）任命した」（同『North China Herald』紙）。また、「３国干渉」後の朝・露国境の状況を、同『North China Herald』は、こう分析している。

「ロシアは相当の兵力をすでに朝鮮国境に配備している。いつでも朝鮮（閔妃）に貸し出す用意がある」、又、「閔氏一族はまたしても閔妃を中心に結集し、忙しく策謀を巡らせている。ロシアを宗主国とする事で朝鮮（閔妃）が期待しているのは、（閔氏一族が）何でも好きな事をする自由が与えられるだろうという事である。ロシアはポート・ラザレフ（永興湾－ロシア領）かあわよくば釜山の不凍港と朝鮮縦貫道路（鉄道？）を獲得するという念願の計画が実現すれば、朝鮮の改革は（井上伯の様に）煩わしい事はいうまい」。

７月６日夜半、金允植外相が日本公使館に杉村・１等書記官を訪ねて、今度は朴泳孝内相に又しても「廃王陰謀」謀叛の容疑が問われ、朴泳孝へ捕縛令が下された成行きを知らせた。朴事件をデッチ上げたのは、閔泳煥、閔応植、沈相薫等の（閔妃派）「宮内特進官」であった、と伝えた。

朴泳孝自身へも李允用・警務使から別途知らせが届いた。朴はすぐさま馬で日本公使館に駆けつけて保護を求めた。公使館は１ヶ小隊の守兵を派出して朴を龍山まで守護した（公使館は通常の行軍訓練が偶々朴の逃避行と同じルートを前後しただけだと強弁した）。７日、朴は仁川から富士川丸に乗船して日本に落延びた。８月１９日朴は米国のウィニペグに到着した。これは、日本政府が朴の受け入れに戸惑っている事を窺わせる。法部大臣・徐光範も、朴定陽内閣に辞表を提出せざるを得なかった。

「７・７政変」直後に、まるで申し合わせでもあった様に（閔妃とヴェーベル〈代理公使〉、ヒトロヴォ〈駐日露公使〉の間に申し合わせがあった筈である）、突然ロシア兵１，６００人が元山と欝陵島に現れ、強硬上陸した。ロシア兵の挙動は趙義淵が率いる朝鮮官軍が解体しかけている時機を狙い澄ましていた。元山に上陸したロシア兵は、日本の元山守備隊（日本後備歩兵第６連隊第２中隊３００人）と睨み合ったが、結局数週間後に自主撤兵した為、緊迫した事態は事無きに終わった。ロシア側はその後、租借候補地の下見調査であった、と釈明した。

ロシアは以上の様に、元山港（不凍港）をロシア太平洋艦隊の恒久軍事基地にするかのそぶりを示した一方で、又、朝鮮国王が敢行した「俄館播遷」を奇貨として翌９６年半ば

以降に、咸鏡道、江原道、平攘市（朝鮮北緯３８度以北主要部）等で租借地を闇雲に借り上げ捲った。つまり先の示威行動は、ロシアが、伊藤博文（総理）、大山巌（陸相）、西郷従道（海相）、陸奥宗光（外相）ら日本首脳部と朝鮮国民の双方に、ロシアが望むならば朝鮮半島のどこにでも、直ちに大兵を強行軍事上陸出来る軍事展開能力が有る事を存分に見せ付けつけていた。ロシアが朝鮮半島に、日・露による朝鮮「南北（勢力圏）２分割案」を進める政策を認めなかったのは、ツァーリ（ニコライ２世）が、朝鮮半島の１部分をではなく、丸ごと併呑する事を欲したからであった。それ故、翌９６年６月９日に締結した「山縣・ロバノフ協定」において、山縣有朋・交渉全権代表は、日・露「同時出兵」条項を挿入する事を固執した。山縣・全権は、「ロシアの単独不進駐」への条件変更を前提とする「日本の（朝鮮半島からの）完全撤兵」政策を以って最善の交渉目標に設定し、その目標は達成された、と満足した。

（５）第３次金宏集内閣（「乙未事件」直前の内閣）

「７・７政変」の後に６・４朴定陽内閣を引き継いだ第３次金宏集内閣（９５・８・２５組閣）の、主なる閣内人事異動の内容に分析を試みて見よう。

この第３次金宏集内閣の組閣前日に、閔泳駿ほか、５０余名の閔氏派が大特赦を受けている。先んじる７月１７日に、宮内府協弁・金宗漢（第２次金宏集内閣総理署理〈書記官長〉：大院君派）が更迭された。それ迄金宗漢は、井上馨公使と王室（国王）とを繋ぐ信頼すべき「パイプ」役を果たしていた。これによって、宮内府大臣が、尹用求（閔妃派：朴泳孝の入閣とバーターで、閔妃が朴定陽内閣に入閣させている）から、第３次金宏集内閣に閔妃の甥である李耕植に代ったが、この人事は閔氏派内部の盥回しであった。

又、李範晋が宮内府協弁になったが、李範晋は金嘉鎮を追い落とした後に、農商工部大臣を兼職した。閔泳駿が９５年６月に芝罘を経由して上海から帰国し、「特進官」として宮内府に梃子入れ（宮内府大臣）に入る予定があった。第３次金宏集内閣の宮内府内は、ほぼ閔派一色に染め上がる。

李耕植は、まるで厚いカーテンを周囲に廻らす様に宮内府を外部から遮断した。閔妃がその隙間から、宮内府顧問・米人リゼンドルに僅かに聞き取れる囁き声で国王の意向を伝えると、更に甥の李耕植・宮内府相が、それを「伝聞」として内閣に漏らし知らせるのであった。

井上の後任は反・伊藤系である事はもとよりだが、非山縣系でもある事が、山縣に実は望ましかった。「山縣閥」の専横色をなるべく薄めなければならないからである。山縣が選ぶとすれば、鳥尾小弥太、品川弥二郎、山田顕義等を真っ先に頭に思い浮かべる筈であったが、それらの旧・同志は生憎既に世を去ったばかりである。次なる候補者には、蘇我祐準（中将）や土佐人であるが谷干城（中将）が上がるであろうが、彼らは実業界に転じて山縣と距離を開けていた（加えて谷は、「日英同盟」推進論者であった）。

だがうってつけの「反骨」（山縣に楯突く事を自慢している山縣系）が残っていた。学

習院院長職で人生スゴロクの「上がり」になってしまい、いかにも暇を持て余している（？）かの観がある観樹将軍（中将）・三浦梧楼である。

三浦は外交にはずぶの素人であった。外交の知識はまったく無い。三浦は着任までの数ヶ月間に、赴任した後、自分は朝鮮で何を為すべきか？を、しばしば愚直に日本政府中央（伊藤首相、陸奥外相）に向かって伺いを立てたが、返事は当然ナシのつぶてであった。それもそのはずであろう。日本政府中央には何の策も無かった。井上が盛んに要求して来る対朝鮮３００万円追加借款に応ずる気がまったく無いだけを中枢部は合意していた。

偶々翌９６年、露清銀行で「ロートシテイン（理事長）報告書」が執筆（ポコチーロフ理事の財務調査に基づく）されているが、その内容は、朝鮮国の国家財務内容が最悪で、ロシアが介入すれば、ロシアの方が逆捩じを食わされ、大変な金融被害に遭うだろう、との分析であった（これがアレクセーエフの短期撤退に繋がっている）。１年前の日本政府の分析も、恐らく同様な見解であった。つまり、三浦梧楼の派遣に際して、日本政府の外交戦略はただロシアの「出方待ち」であり、三浦は何も期待されていなかったのである。

９５年９月１日に赴任した三浦公使と朝鮮宮中との関係は最初から甚だしい隔絶状態であった。三浦にとって朝鮮宮中とは、姿が見えない、取り付く島もない相手の趣であった。

中立リベラル派である魚允中１人が中枢院副議長兼宮内府総理署理（書記官長）で宮内府に残っていたが、９月３０日に辞表を提出した。その後では三浦公使に、「宮中」へ通ずる道は蟻の一穴の入り口も無くなってしまった。

第３次金宏集内閣についての分析を更に続ける事にしよう。朴泳孝後の李銑永から、朴定陽（閔妃派）に内部大臣が代っているが、この人事も閔派の盥回し人事である。閔妃は前総理の閔派・朴定陽を同内閣の内部大臣に据えた。ただし、協弁レヴェルに俞吉濬（第１次金宏集内閣書記官長：大院君派）がまだ残っている。内部大臣職は、朴定陽から、閔妃の意中の「特進官」である李範晋が引き継いだ。李範晋は宮内府協弁も兼務した。

中枢院（軍国機務処と承政院が合併した内閣諮問機関）議官・申萁善が解職された事も注目しなければならない。尚、申萁善（大院君派代表）は、９４年７月第１次金宏集内閣組閣迄の軍部大臣であり、９４年１２月第２次金宏集「改組」内閣には工部大臣である。同第２次金宏集「改組」内閣の軍部大臣は、趙義淵（大院君派）が引き継いだ。趙の下で軍部協弁は、権在衡、李周会（署理？）である。朴定陽内閣期に度支部大臣であった魚允中は、第３次金宏集内閣以降閣内から引き離されて、中枢院副議長（ちなみに、第１議官・申萁善）に棚上げられたが、９月３０日に辞表を提出して中央政界を退いた。

第３次金宏集内閣において度支部を握ったのは、これも又「特進官」の沈相薫（閔派の中心人物）である。そしてその後、沈相薫は朴定陽に代って、内部大臣（李範晋と交代）にいよいよ転じる。この様にして、第３次金宏集内閣は、宮内府（宮中）、度支部（財政）、内部（行政）という死活的３衙門の総てを、閔派が排他的に掌握し始めたのであった。

軍部（朝鮮官軍）代表者である趙義淵の辞表提出は、先んずる５月 18 日であった。趙義淵から軍部大臣職を引き継いだのは、前朴定陽内閣で度支協弁から警務使に転じている、

安駉寿であった。その配下には、①警務使・李允用、②警務副使・韓在益、③「訓鍊隊」連隊長・洪啓薫等の顔が揃っていた。その全員に、閔氏派色が鮮明である。

確かに第３次金宏集内閣は、「《『金』看板》とは名ばかり」内閣だと異名を取る程に変わったのであったが、しかしながらその発足初期には、「金２・閔８内閣」であった。

同内閣の中心者は、（朴泳孝を失脚させている）内部大臣・朴定陽（前総理－閔氏派）であったが、その下の協弁に、最も強力な大院君派の次世代指導者の、鼎に喩えに喩えればその１本目の足に喩えられる俞吉濬（第１次金宏集内閣総理署理〈書記官長〉：俞吉濬は、「乙未事件」直後にも書記官長に任じ、第４次金宏集内閣の中心人物になる）が入っていた。

農商工部には、申箕善（大院君派）が退いてから大院君派の残留代表である実力者金嘉鎮（大院君派：第２次金宏集内閣で、申箕善・工部大臣の協弁であった）が、協弁から大臣に昇格して率いた。金嘉鎮は大院君派若手の鼎の２本目の足に匹敵するであろう。ちなみに同協弁が鄭秉夏である。

趙義淵と共に朝鮮近代官軍の育て親として知られる申箕善は中枢院第１議員に転じている（前述）が、大院君派の次世代代表の有力者である張博（第２次金宏内閣書記官長〈大院君派〉：張博は、「乙未事件」直後に、法部大臣代理に任）が度支部協弁に任じていた（当初、李鼎煥）。張博は大院君派を支える若手の鼎の３本目の足である。

一方、これに対決する閔氏派の動向を見てみると、閔氏派は、宮内府をまず固める為に、宮内府大臣に李耕植（閔妃の甥）を入閣させている。そして、同協弁に、「特進官」の李範晋を入れた。国家財政を掌握する度支（財務）部大臣にはこれも「特進官」沈相薫が任じられる事になったが（前述）、同協弁には大院君派次世代の代表・張博がいるから（前述）、張博が沈相薫に睨みを効かせる状態である。

以上の如き人事異動を整理すれば、閣内に尚留まっている大院君派は、趙義淵・前軍部大臣が第２次金宏集内閣閣外に去った後は、（３ヶ月間の朴定陽短命内閣を飛ばして、）８月２５日組閣の後継第３次金宏集内閣下で、まず、①申箕善・中枢院副議長が筆頭的な存在であり、次には、申箕善が育てた農商工部を引き継いでいる、②金嘉鎮・農商工部大臣である。３番目には、③俞吉濬・内部協弁がいる。そして４番目としては、④張博・度支部協弁が注目される。反面その状態を閔氏派から観察すれば、閣内と中枢院とからこの４人さえ取り除ければ文字どおり完全な「閔１０内閣」が完成するであろう。

閔氏派の「対抗馬」は、まず、①沈相薫・度支部大臣（後、内部大臣）が中心リーダー格であり、次に、②李範晋・農商工部大臣兼宮内府協弁を挙げ得る。

農工商大臣・金嘉鎮が第３次金宏集「見せかけ」内閣で、申箕善・元陸相（第１次金宏集内閣）及び趙義淵・前陸相（第２次金宏集内閣）の「名代」であった。次世代リーダーと期待される俞吉濬・内部協弁は、豹変が夥しい安駉寿（朴定陽内閣度支協弁、第３次金宏集内閣では軍部大臣に移動）の宿命のライバルであった。俞吉濬は第３次金宏集内閣下において免職され、遠地の義州監察使として中央から飛ばされてしまった。

（６）閔妃の指示による「保護国化請願書簡」のウラジオストック送達事件（閔妃第４カウンター・クー・デター）

三浦公使が到着した後になってからも、９５年９月１７日迄井上馨は徒に帰日の日程を１日延ばしに未練がましくも引き延ばしていたが、当１７日、夫人・武子を伴っていよいよ仁川港から朝鮮を去った。尚、武子は閔妃に謁見した（屏風越しであろうが）唯一の日本人女性である。

井上が帰国する船上に、井上公使の今迄の功労を日本要路に謝礼したい、と内部大臣に就任したばかりの特進官・沈相薫が称して乗り込ませた１人の人物がいた。その人物は特命全権大使の肩書きを持っていた。その派遣計画の策定には前任内相の李範晋（朴定陽内閣宮内協弁）、閔妃、ヴェーヴェル代理公使、ヒトロヴォ（駐日露公使）が当たっている。

沈相薫は朴定陽内閣期の度支部大臣から、第３次金宏集内閣期に李範晋に代って内部大臣に就任していた。朴泳孝の色を内部衙門から掻き消すことが、沈相薫に授けられた使命だったであろう。

さて特命全権大使に選ばれたのは李主計局長であったが、彼は恐らく度支部大臣時代に沈相薫が最も信頼していた部下であろう。李主計局長は広島まで井上と同行していたが、同地でプッツリ姿を晦ました。彼は恐らく今後の旅程をヒトロヴォ駐日露公使と日本内のどこかの地で相談したのであろう。李主計局長が次に公に姿を現した場所は、ウラジオストックである。李主計局長は同地でムラビヨフ極東総督に対して朝鮮宮廷からロシア皇帝に宛てた密書を呈出した。その内容は朝鮮国の「**保護国化請願書**」であった。

灰色の瞳が印象的で、ロシア人にしては小男である在東京露公使館に務めるヒトロヴォ公使は、ブルガリア駐在時代には殺戮を意に介さぬ獰猛さで名を売った男であったが、東京に着任してからは一転し、日本の民芸品集めに熱中する、愛敬溢れた気楽な親日家を装った。しかし、ヒトロヴォは、９５年４月２３日の「３国干渉」の斡旋を積極的に主導し、外交術の凄腕さを揮った。

平素は慎重この上ないヒトロヴォであったが、この時に限っては露極東総督の良識を信用し過ぎたかも知れなかった。ムラビヨフは、同書簡をペテルブルグの露王宮にそのまま送達してしまい、重ねてペテルブルグでは、ニコライ（２世）帝が無思慮に、戴冠祝賀使節・閔泳煥を面前にして、悪びれずに同書簡を無造作に公開してしまった。露王宮の諸務万端は、朝鮮問題を軽視するウィッテ伯（大蔵大臣）が仕切っていたが、ウィッテの脳中は、黄海へ達する雄大な大シベリア鉄道南部支線建設計画の事だけが占領している。

このツァーリの短慮による愚行に閔妃も、ヒトロヴォも大仰天した。朝鮮政界に衝撃が駆け抜けた。同「請願書」は勿論国王名を発布者に騙っていたが、内務大臣・沈相薫の副署しか記されていなかったと推測できる。真の発布者は果して誰だったのか？李主計局長は大院君が刺客を自分に差向ける事を恐怖してハバロフスクから直ちに姿を晦ました。

『ノーボエ・ブレーミャ』紙が同事件の一部始終を報道したのは９５年１２月１３日で

あるが、その記事を執筆したYa・A・ゴレムイキン記者の署名は９月２８日付けになっているから、この衝撃的ニュースがソウルの貞洞外交界方面に知れ渡ったのは、９月２８日より以前であった、と我々は考えなければならない。

朝鮮国民から朝鮮王室（国王と王妃）に重大な「売国奴」の嫌疑がかけられた。モルレンドルフ時代に起こった（有事の）「介入要請」レヴェルであったなら、「ロシアが朝鮮を誑かしている罠だ」、と、金允植外相がかつて袁世凱に用いた言い抜けを使い回し出来たかも知れなかったが、今回の「保護国化請願書」は確実な証拠写真付きであった。朝鮮国王が９５年初に宗廟に出向いて祖霊を前に朝鮮の国家独立と「甲午大更張」を自分が成就させる事を誓ったのに、それから僅か半年ばかり経てその舌の根も乾かぬ間に、朝鮮王室は他国（ロシア）に朝鮮を「身売り」した！と朝鮮国民の怒りが天を衝いた。

こうなると、朝鮮国王が王位にい続けようと執着すれば、閔妃が国王の承諾を得ずに、独断で王権を犯し同書簡を差出した、と国民を納得させる他に術は無かろう。閔妃がこの様に大胆な売国工作に打って出るのは実は始めてではなかった。上に述べた様に、例えば閔妃は同様な行動を８６年７月にも、モルレンドルフ、閔応植、閔泳煥らを用いて既に試みている事が、朝鮮国民の間に広く知れ渡っていた。

先にその例では、閔泳翊が閔妃を裏切って李鴻章に注進に及んだ為に、「第２次朝露秘密協定」はそれ以後頓挫した。その当時にイギリスがすかさず対露牽制に動いた。イギリスは巨文島を占領した。ロシアは対抗上イギリスに、永興湾（不凍港：咸鏡道）を占拠すると脅し、両国の関係が緊迫した。しかし、李鴻章が仲介役に入って、８７年２月にイギリスは巨文島から撤退し、同事件は事無きに終わった。

英・露の朝鮮半島を巡る睨み合いの中で、清国ばかりが、８２年９月に「中朝商民水陸貿易章程」（朝鮮を宗族国として規定する）を締結し、朝鮮への経済的浸透を強めた。

かくして、孔徳里に潜んでいる大院君と、大院君の長男・李載冕、その子李浚熔（大院君の孫）は、思わぬ次期王位継承権が廻って来る予感を感じた。しかし、王宮（宮内府）内で孔徳里と連絡を取る事が出来るうってつけの適当な人物は誰がいようか？７月に金嘉鎮・農商工相（朴定陽内閣）が閔氏派によって更迭された後では、８・２５第３次金宏集内閣では閣僚レヴェルを探しても、大院君派は見事に一掃されてしまった、かに思われた。

ところが、宮内府内蔵院卿・農商工部協弁（次官：農工商部大臣は李範晋）に鄭秉夏が残っていた。鄭は、宮内府の女官人脈に親しいから、そつなく閔妃の元に出入りする事を許されていた。鄭秉夏は、１０月７日、閔妃の使い（救援出兵の要請）をして、日本公使館に２度も三浦公使を訪ねて来ているから、と私はそう見るのである。

６．７日夜祝賀パーティーと８日未明「深夜会見」

思い返してみよう。９４年７月２３日、朝鮮官軍（親衛軍）５営（扈衛庁、統衛営、壮衛営、総禦営、経理庁：総兵力約６，０００人＋郷勇〈地方〉軍）は一旦武装解除されたが、８月２０日「日朝暫定合同条款」によって、日本軍将官の指導によって壮衛営から選

抜した教導中隊を編成することになった。この部隊は李斗璜の指揮によって、日清戦争の平壌（清国軍大本営所在地）侵攻作戦に、日・朝連合軍として参戦したのであった。李浚熔は、アメリカ人法律顧問・クラレンス・グレートハウス（具礼）、チャールズ・リゼンドル（李仙得）に諮って、親衛隊（朝鮮官軍）をアングロ人を指揮官とする部隊に改組しようとしたが、同計画ははかばかしく進展しなかった。

閔氏派は、９５年前期に「甲午改革」を積極的に進める井上公使に向かって、朝鮮財政改革の柱は、第１に親軍（朝鮮官軍）予算の半減にするべきである、と迫った。状況は、１８９５「4月１２日勅令」によって、7月から国軍費が半減する予定になった。親軍は解体の危機に臨み(14)、一方、「訓錬隊」と「侍衛隊」が、王宮の守護任務を奪い合う関係であった。

鄭秉夏は、９５年１０月１２日、すなわち「乙未事件」（閔妃殺害事件）の後、直ちに組閣された第４次金宏集内閣において、一際目立つ論功行賞を受け、農商工部大臣に昇格した。

そもそものクー・デター計画の話は、９月頃、堀口九万一・領事館補が、鈴木順見（大院君と久しく交際、朝鮮語に堪能）を通訳として引き連れ、岡本柳之助の案内で孔徳里の我笑亭（大院君宅）を訪れた日に始まる。９月１４日、「訓錬隊」を廃し、「親衛隊」２大隊を以って置き換える王令が発された。一方第１大隊長・李範来、第２大隊長・李軫鎬が任命された。明らかに閔妃による、禹範善（朴泳孝派）を潰す措置である。

９月２８日、宮廷は閔泳煥を駐米公使に任命した。９月２９日、朝臣の服装が韓式に戻された。閔氏派は「甲午大更張」の精神をひっくり返そうと本腰を入れている。

杉村濬・１等書記官は、１０月１日、渡辺鷹次郎を孔徳里に派遣し、先日の堀口・領事官補との会談内容を再確認させた。翌１０月２日大院君が三浦公使宛てに返事の使者を送って来ている。１０月３日～５日に、岡本柳之助が孔徳里を訪ねて、同地に滞在した。

同２日、宮中が、日本と親交のある者を悉く排除せよ、との建議を受けいれたのであった。閔氏派閣僚たちは、金嘉鎮・農工商部大臣を失脚させようと、こぞって立ち上った。１０月３日、彼らの狙いどうりに金嘉鎮が更迭された（金嘉鎮は「乙未事件」直後、農工商部大臣に任、しかし、その後虐殺される）。金嘉鎮に代ったのは、沈相薫であった（尚、同協弁は鄭秉夏が任じている）。

１０月６日、閔泳駿が宮内府大臣に「内定」した。同６日、「訓錬隊」の武器没収勅令（内示）が発された。７日、「訓錬隊」に解散命令がいよいよ発布された。同日武器を没収せよとの厳命である。ところで、「訓錬隊」の解散は単なる解散命令ではない。それは、「侍衛隊」（趙義淵の更迭と共に創軍し、２ヶ大隊で構成する。訓錬隊拡大構想は、６ヶ大隊が４ヶ大隊に縮小された）との度重なる衝突事件（訓錬隊を解散させる為に、閔妃は意図的に何回も衝突事件を仕組んだ）を罪行と断定し、「訓錬隊」に一方的に非があると判定し、「訓錬隊」を不忠・反逆罪の刑罰処分に処するのであった。

溯って、１８８２年に堀井礼造大尉が別技軍を育て、９５年２月に楠瀬幸彦中佐（朝鮮

国軍部顧問）がその土壌の上に「訓錬隊」（２ヶ大隊、８００人）を創設した時に、朝鮮官軍のトップの地位にいたのは趙義淵軍相（第２次金宏集内閣－大院君派）であった。趙軍相は、申箕善・前軍相（第１次金宏集内閣－大院君派）から同職を引き継いでいる（申箕善は工部大臣に回った）。

ここから我々は、三浦、大院君、国王の３者に注目して、３者が、「乙未事件」（閔妃殺害事件）にどの様に関っているのか（仮説）？、その関わり方を、後世の観点を利して、あらためて検討して見よう。

（１）三浦公使は大院君に、①大院君と国王が「連合」し、大院君が三浦との約束（「要綱４」）通りに政界から引退し、②国王による「単独絶対専制」制（閔氏戚族支配内閣を潰す）を樹立する事を望んだ。

（２）大院君は、①大院君と国王が「連合」し、閔妃を粛清（生死を問わず）し、②国王「単独絶対専制」（閔氏戚族支配内閣を潰す）を樹立した「後」で、③直系李家（李載冕、李埈鎔）体制を再興し「後継」させようと望んだ。

（３）国王は、①自分（国王）と大院君が「連合」し、閔妃を廃后（ウラジオストック「売国請願書」を清算する意味）にし、②国王「単独絶対専制」（閔氏戚族支配内閣を潰す）を樹立した「後」で、③閔氏派から、有能な沈相薫だけを政治的に存命させて腹心とし、国王自らが新内閣（再編・閔氏派体制）を率る事によって、直系李家に対抗して自分（国王）の在位を「延命」させようと望んだ。

３者の「目的」が、①の目的で合致してクー・デター前半部分が終了し、そこから、大院君－②、③、及び国王－②、③の目的が分岐するクー・デター後半部分に進む、というのがクー・デター計画の「全体図」であると理解すれば、「乙未事件」の進行過程は、論理的に極めてスジが通るであろう。そして実際は、②の「分岐」点を経て、入闕した大院君が、朝鮮国王との「予定会見」後、国王を幽閉した。

②の「分岐点」を経てから、その暫く後に、国王が大院君に反撃して、翌９６年１月３０日に「俄（ロシア〈公使〉）館播遷」を決行する、と推測出来るのである。

さて、９５年１０月８日午前４時に康清宮で、国王と大院君は予定より１時間遅れで「公式」深夜に会見し、対面対座で第４次金宏集内閣の組閣構想を調整したと見られるが、決裂した。朝鮮国王が沈相薫、李範晋らの政治的生き残り（咎無し）を固執したからだったのであろう、と私は推測する。翌９６年９月（「俄館播遷」中）に、国王は国体を「議政府官制」形式に戻し、単独専制として「大君主」体制を完成した。朝鮮国王は「乙未事件」に関る、大院君－③構想部分（前述）を粉砕し、９７年８月、年号を「建陽」（開国５０６年）から「光武」元年に改元して、１０月に国名を「大韓帝国」に改めた。

廃王を迫る「国内勢力」は最早存在しなくなっていた。優柔不断といわれ続けて来た国王だったが、９７年１０月から絶対王者に見事に変貌し、凄まじい獅子奮迅ぶりを披露し

た。韓国太皇帝（朝鮮国王）はアレクセーエフ（露人）を総財務監職から引き下ろし、代わって英人ブラウン（Macreavy Brown）を以前の職に戻した。かつまた、翌９８年３月、プチャータル露人大佐が率いるロシア人将校たちの韓国での任務を解除した。

太皇帝はロシアと適切な距離間隔を保とうとした。この方針に沿って、太皇帝は９８年２月のロシアによる釜山絶影島租借交渉、３月からの露韓銀行漢城（ソウル）支店の設置運営を途絶させた。太皇帝は最早「意志無き人」ではなかった。

溯って、９４年末の着任して間も無い頃に井上馨・前公使が、李浚熔の日本留学を何よりも急（せ）いた事を私は想起するのであるが、その時井上も、この「国王－③」構想を早くも予見し、大院君の力をなるべく削ぐ事によって、朝鮮国王の対ロシア接近に前もってブレーキを掛けようと狙ったのだ、と私は解釈する。尚、井上は「乙未事件」後の１０月２１日に再（３度目）来朝し李浚熔問題にまたも奔走して、李浚熔を日本へ連れ出す事に成功したのであった。しかしその他面では、朝鮮で前公使・井上の評判は頗る芳しからず、約２週間の滞在中に、井上は然したる働きも全く出来なかった。

朝鮮国王は、国王「単独絶対専制」を聳やかせる事によって、「閔氏戚族『再編』内閣」制の上に国王の座を超然化しようと執着したのであった。「俄館播遷」（９６・２・１０）によって朝鮮国王は、大院君派を閣内から総排除する奇策を弄した。朝鮮国王は「俄館播遷」期に、大院君と李載冕（実兄）を、「国王命」によって拘束したと信じられる。

再び話を「乙未事件」の「直前」に戻そう。岡本柳之助（朝鮮国軍部兼宮内府顧問）は９５年１０月６日に、金宏集総理、金允植外部大臣と面会した後、同６日、楠瀬中佐（岡本と同じく朝鮮国軍部顧問）と同道して一旦仁川へ向かった。楠瀬顧問ら２人の仁川行きに随伴したのは、訓錬隊付き副尉・成暢基、申羽均、参尉・安泰承、王椧植、権学鎮、李成圭、趙義範等の朝鮮人下士官７人であった。これだけの人数が動けば嫌でも人目に付くであろう。彼ら一向は、８日午前３時の大院君・高宗の緊急深夜「入闕」、「予定会見」の段取りの調整を謀り、他方安泗寿・新米軍相ならば仁川迄「予防拘束」に追手を差し向ける胆力迄はあるまい、とタカを括って、王宮に圧力を加えた積もりである。

新納時亮・海軍中佐が、大院君「入闕」の第１報を参謀本部の川上操六・次長に入れている事実が知られている。新納が朝鮮宮中に今、正に起こらんとしている事態を注視していた事は役務であり、それは不思議でも何でもない。大院君の王宮「入闕」は、８日午前３時の深夜強行「会見」として、予め要路に「予告」されていたからである。

変事が僻地で起こっているとはつゆ知らないまま、閔妃は３０人の巡検（警察）による我笑亭の警護を信じ切っていた。王室費３０万円、大院君４万円の宮廷歳費の取り分は決めてあったが、９５年分は今迄のところ大院君に４万円が渡っていない。閔妃による兵糧攻めである。閔妃は、大院君を監視下に置いているから、と、自分と戚族が「決定的勝利」を収めた、かに酔っていた。閔妃は、「大皇后陛下」としていよいよ「勢道政治」を推進するつもりがあるから勇躍する心を押えかねていた。他方、国王は、「ウラジオストック事件」が露見してしまった以上、閔妃を切り捨てなければ、自分の方が「国賊」として、

廃位を迫られる事が必定であろう、と内心で大いに焦っていた。訓錬隊解散日（７日）当夜に、閔妃が、閔泳駿の宮内府大臣昇格内定パーティーを開いた理由は、閔妃の焦りと不安がそうさせ、宮殿に内外賓客を招いて閔氏派の威勢を誇示すれば、国王や大院君が萎縮し、８日深夜「会見」を取り止めるかも知れないと浅慮したのであろうか？

なるほど宮廷の金蔵は心細い迄に底を突いていたのであったが、閔妃は、裕福で寛容な隣の大国（ロシア）に朝鮮の「保護国」に是非なってもらいたかった。閔妃は自分の直感を信じる事にした。朝鮮国が資源や利権を惜しげも無く「投げ売り」するならば、ロシアの慈悲深いツァーリが必ず朝鮮に十分な見返り融資を給与してくれ、少なくとも閔氏戚族の勢道繁栄だけは半永久的に保証されるに違いない、と閔妃は考えを廻らせた。

だが、この考え方を突き詰めれば、閔妃にとって夫の朝鮮国王も存在の必要性が要らず、実子・拓だけが必要なのだ、という覚悟に繋がった。ましてや我が夫（高宗）は、１０年前の甲申事件の際に閔氏一族を根絶やしに排除しようと陰謀を企てた。その時に自分自身すらも排除の対象に含まれていた恥辱と恐怖を、閔妃は心奥に深く刻んで恨んでいた。総資産５００万元と見積もられている目障りな雲峴宮を処分してしまえば、とりあえずは、９５、９６年度２年分の国家予算ぐらいを浮かせられ、国政を繋いで凌げるであろう。

７．回顧 ―（１）大院君の２度の逡巡エピソード

咸鏡道の１港を閔妃がロシアにしきりと貸したがっている、という噂が巷に飛んだのは、９５年半ば頃であった。閔妃による、所謂（９５・９・２８）**「ウラジオストック売国請願書」**露見事件が発生した（ちなみに、噂の真偽はともかく、国土利権の「切り売り」は、１８９６年２月頃から頻々と行われた）。かつて閔妃はこういった。「たとえ土地の若干を失おうと、日本の仇を復さざるべからず」、と。閔妃の心中に抱かれている（日本に対する）仇とは、井上馨が高飛車に、異国（朝鮮国）に導入しようとする「内閣制」は勿論であったが、露骨に言えば、井上が宮廷費（内帑金）を潰そうとしたのであった。

閔妃はふんだんに使える宮廷費を失った。しかし閔妃は井上公使が朝鮮を立ち去った後、すぐに造幣局を宮内府に直属させた。

閔妃は、又、警務使（警視総監）に、気を許してか？権在衡を配した。訓錬隊を廃止さえ出来れば、閔妃が軍（侍衛隊）と警察（権在衡）の権力を握る計画が進捗するであろう（乙未事件「後」を見れば、権在衡は、元々の大院君派の扱いに戻っている）。

井上の２度目の帰任「直後」に発布された９５年９月２９日勅令の中には、わざわざ「勅令第１号」とナンバリングがしてあったと言う。閔妃は「甲午大更張」（９５・１～９５・５：井上馨が推進した朝鮮版明治維新）に価値を一切認めなかった。勅令は、今後は国王の署名や内部大臣の副署が必要なく、宮内大臣（李耕植：閔妃派）と掌礼院長の副署で十分である事に制度が改められた。

しかし閔妃の計画に思わぬ落とし穴があった。閔妃が追い落とした筈の朴泳孝のしぶとい執念と、財政削減（半減）に付け込んで（？）形式上は解体させている「親軍」組織の

伏在を、閔妃は忘却したか、軽んじていた。

「乙未事件」の直後に、事件調査を請け負った内田定槌・総領事が、９５年１１月５日付で西園寺臨時外相宛てに提出した「公式報告書」（「明治２８年１０月８日王城事変の顛末に付具報」）は、三浦公使の大院君クー・デターへの関与の端緒を、「三浦公使は予め岡本柳之助（かつて竹橋事件で、東京鎮台予備砲兵隊長を更迭）を通じて大院君の内意を確認したる」上、「入闕後決して政治に容喙せぬ事、李竣熔は直ちに日本へ留学させる事、その他重要な条件を認めた『誓紙』を大院君より（岡本を通じて）受け取った」（国家図書館憲政資料室に収めてある史料はレプリカであろうか？）、と、又、「（大院君）クー・デター計画は、李周会が、大院君側から三浦公使に持ち掛けた」、とも書き残した。

三浦公使が大院君に提案した関与承諾条件は、大院君を孔徳里から康清宮へ訓錬隊（第２大隊）と共に「京城守備隊」が警護し送り届ける事に関与を限定する事、であった。

内田領事は１０月７日夜、午後７時から夫妻で、単身赴任の三浦公使の為に歓迎会を催した(15)。内田が、８日午前４時の大院君入闕事件（乙未事件）については事前に何も知らなかった事は、歴史に明らかにされている。

「クー・デター」決行の前夜である１０月７日夜半に、岡本柳之助が孔徳里の我笑亭（大院君の幽閉先）を訪ねると、「大院君は大いに喜び」、長男の李載冕、孫の李竣熔もその場に顔を出して謀議に参加した、と、内田は報告している。いよいよ、岡本（朝鮮国）軍部顧問が大院君に出陣を促すと、大院君は、さももったいぶった風に、朝鮮古来からの出陣儀式を執り行って数時間を費やす逡巡姿勢を見せた。北川吉三郎という岡本の同行者の１人が、その時大院君が吐露した言葉を偶々側聞していて記録に残している。大院君はこう岡本柳之助を大声一喝した、という。

「元来君ら（日本人）は外国人なり、我が朝鮮の王室に関して彼是（かれこれ）容喙すべきものにあらず」、と。

この、大院君が苛立った発言を、大院君の出立を急き立てる岡本に大院君が反発している様子であると受け取る後世の人が多いが、大院君が李浚熔擁立を金輪際諦める、という三浦への「誓約４」を、未だ釈然とせずに、またしても後悔心が疼き、土壇場で岡本柳之助に、孫の話をもう１度蒸し返して未練がましく噛み付いて見たのではなかっただろうか？しかし、岡本柳之助にしても、三浦公使しても、「誓約４」（大院君の政界引退と、李浚熔の３年間日本留学を取り決める）を譲る訳には行かなかったであろう。

大院君の「１度目の逡巡」の遅延行為によって、閔泳駿の祝賀パーティーが７日夜半から始まり午後９時に一応散会してからも居残っていた露・公使たちすらさすがに引き上げた事を、８日午前４時頃王宮前に到着する大院君の一行は知っていた。その後、閔妃の警護に「侍衛隊」を付けるか否かは、朝鮮国王だけが判断する権限を持っている。

朝鮮王宮（景福宮）を目指すクー・デター部隊は、５班で構成されていた。行列は、①

その先頭に、李周会と具然寿（農工商部主事：鄭秉夏のレポ）が立った事を記録が記している。彼ら２人は朝鮮人義士の代表であろう。その後に、②輿に乗った大院君を前後に挟みながら進んで続いて行った。禹範善隊長が率いる「訓錬隊第２大隊」の総勢約４００人の光化門到着は８日午前４時頃である。

その次列に、③馬屋原務本少佐が率いる「京城守備隊」（日本陸軍第１８大隊３ヶ中隊）約４５０人と、日本領事館警察６人、そして楠瀬幸彦・軍部顧問率いる朝鮮国軍部顧問部１１人が続いた。

その次に、④岡本柳之助と、安達謙三・『漢城新報』社長が率いる朝・日混成の徒歩「壮士隊」（凶徒隊）約４０人が徒歩で続いた。

尚、混成壮士（凶徒）隊は２班に分けられている。第１班（少人数：佐々正之、田中賢道ら）は『漢城新報』社で暫時待機し、安達に引率されて孔徳里に大院君を迎えに行った。現地で、仁川から戻って来る岡本と合流した。第２班（国友重章、山田烈聖ら）は、「巴城館」（柴四郎の定宿）に篭ってから、訓錬隊と西大門外で合流した。

輿行列の⑤殿軍（しんがり）は、「訓錬隊」第１大隊（李斗璜大隊長 —前・朝鮮官軍〈竹山府使〉、指揮）、と同第３大隊（李軫鎬 — 前・朝鮮官軍〈官営中隊長〉、指揮）の残軍混成部隊であった（人数不詳：数百人説）。

溯って、李周会（大院君のリエゾン）、中原雄三こと鄭蘭教（朴泳孝のリエゾン）、山田唯一こと柳赫魯（金玉均のリエゾン）、岡本柳之助の４人が、１０月８日午前３時に、孔徳里から大院君を連れ出し、朝鮮王宮へ向けて出発したのであった(16)。

漢城（ソウル）市内に入ると、輿に乗って孔徳里を発った大院君の１行は、禹範善・「訓錬隊」第２大隊長と、まず西大門外で合流した。

第２大隊に所属する朝鮮兵の多くが、８日午前２時に夜間演習だと思って呼集された、と通説は述べるが、７日の解散命令は、武装解除、士官処罰を含む命令であったから、夜間演習がある事を単純に兵が信じる根拠は無かっただろう。大院君の予定深夜会見へ「入闕」護衛が任務だ、と兵たちは聞かされていた筈であった。洪啓薫・「訓錬隊」連隊長が、兵舎出発時に、既にその姿を晦（くら）ませた。

その後、同隊列は、馬屋原務本少佐が率いる日本軍「京城守備隊」の約４５０人と合流した。只、この時馬屋原少佐は或る奇妙な行動を取った。当初の岡本柳之助の「計略書」では「京城守備隊」は南大門前で待っていて、「訓錬隊」第２大隊より先に大院君と合流する段取りであったが、実際は、「計略書」に書かれた道を読み間違えた、と馬屋原が称して、「京城守備隊」は「訓錬隊」第２大隊より１足遅れる形で西大門外へ到着し、そして大院君が乗る輿の一行に合流したのであった。この馬屋原の意味ありげな行動は、やはり馬屋原の故意によるものであろう。馬屋原は（三浦の指示どうりに）、漢城（ソウル）市内で「京城守備隊」が大院君一行と偶々「遭遇」し、乾清宮までその一行の到着を安全に「護衛」する、という形式に固執し、遺漏が無い様に事を進めている。

王宮（景福宮）の光化門外に到着した大院君の一行は、洪啓薫・「訓錬隊」連隊長が率

いる「訓連隊」・第一大隊の残余約４０名と遭遇し（午前４時頃）、１部が交戦状態に入った。その時、洪啓薫・「訓錬隊」連隊長は、こう叫んだといわれている。「安駟寿・軍部大臣もこの場に来ておられるぞ！」、と。

ところが、この洪・連隊長の停戦命令に耳を傾ける者は大院君側に１人もいなかった。申泰求・前連隊長が閔妃の策略で５ヶ月前に更迭され、代って、閔妃の寵臣・洪啓薫が「訓錬隊」を解体処罰する為だけに抜擢されていた。「訓錬隊」は、申箕善・前軍相（第１次金宏集、朴定陽内閣）、趙義淵・元軍相（第２次金宏集内閣）体制下での指揮命令系統を保っていた。洪啓薫・連隊長は、同遭遇戦に、狙撃弾を身に受けて落命した。

「訓錬隊」第２大隊と「京城守備隊」、大院君の輿が康清宮（国王一家の私的生活の宮殿）脇迄進んで来るとまたしても立ち止まった。「国王の（公式の）許しが無ければ、私はこれ以上は進まない」、と、大院君は輿を留置させた（２度目の逡巡）。

訓錬隊と京城守備隊は大院君の輿の周りを警護しつつ、朝鮮国王がいよいよ意を決して午前５時頃に、予定の「公式謁見」（康清宮）の席に進んで姿を現す迄、その場所に留まり、大院君の側に控えてひたすら待機した。

８．展望 ― 第４次金宏集内閣（乙未事件後）の顛末

８日午前５時頃、国王は大院君と対面対座し、大院君の教唆に従って、まず李載冕（国王の実兄、大院君の長男）を王宮（景福宮）に呼び寄せた。国王の実兄は、新組閣（第４次金宏集内閣）の第１番目に宮内府大臣に任じられた。すなわち、この人事は真っ先に宮廷費の配分を大院君側に有利に修正する意図があった。尚、李載冕は、甲申事件では第２順位（左右参賛）である（第１順位は李載元〈大院君の甥〉が首相〈領議政〉）。次の第１次、第２次金宏集内閣では李載冕は宮内府大臣であったが、朴泳孝の９５・「７・７」失脚事件に関連して宮内府大臣を更迭された。

大院君は金宏集に、継任・第４次金宏集内閣を組閣させた。大院君は最も重要な軍部大臣に、趙義淵を任じた。また権栄鎮を警務使（警察庁長官）に任じる。趙ー権（栄）国軍・警察体制が形成された。

新内閣のリエゾン役は、俞吉濬・内部大臣代理兼総理署理と、権在衡・法部署理（書記官）が務めた。尚、俞吉濬は第２次金宏集内閣の総理署理（書記官長）である。また、権在衡（一時期閔妃に接近した？）は、第１次、第２次金宏集内閣の軍事協弁である。

沈相薫・度支部（財務）大臣、と次期総理候補の金嘉鎮・農商工部大臣の名前（農商工部大臣署理〈書記長〉に鄭秉夏）も読み上げられた。（予定）内閣は１０月１３日に発足する事を決めた。

次々と王宮に呼び出される新閣僚候補者の顔を覗いて見ると、内部大臣には朴定陽が呼び出された（出頭せず）。度支部（財務）大臣には沈相薫が呼び出された（出頭せず）。沈相薫（出頭せず）を欠いた為に魚允中が代りに当てられた。法部大臣には徐光範（学部大臣臨時署理を兼務）、同協弁に張博（間もなく法部大臣代理）が指名された。

しかしこの様に逃散者が多くあれば、国王が、再び自分に廃位（李浚熔への譲位）の危機（今度は閔妃による陰謀ではなく、大院君による陰謀によって）が迫っていると疑惑を募らせたとしても無理はない。

李允用（朴定陽内閣、第３次金宏集内閣警務使：後の、９６・２・１０「俄館播遷」期間中の金炳始内閣で軍部大臣兼警務使）、李完用（朴定陽内閣学部大臣、第３次金宏集内閣外部・農商工部大臣）等も、国王の招集に参内せず逃亡した。逃亡後は、１２月の「春生門事件」と兼ね合せて考えると、貞洞街・米国大使館中に逃げ込んだと推測するのが妥当であろう。

ところで、第４次金宏内閣の組閣人事の纏めに戻ると、大院君が軍部を、申箕善、趙義淵という腹心の実力派両軍事官僚によって押さえ込んでいた。一方国王は、沈相薫・度支部相と朴定陽・内相の任用に執着した。国王は、財務を押さえ、兄の李載冕宮府内相に対抗しようとした。しかし、国王が望みを掛けている沈、朴（定陽）両人がいち早く逃亡していたから、度支部は魚允中（前述）に、内部は俞吉濬代理（総理署理兼務〈前述〉）に、そして、法部は徐光範の失脚から張博が抜擢され、いずれも大院君派であった。

（８日）午前９時頃、まったく何事も無かった如く宮廷は平常の業務に戻った。三浦公使は、午前６時頃に、露、米公使と前後して国王の前に呼び出された。三浦公使は、「７日に閔妃から２度に亙って参内せよとの緊急要請を受けた為、只今到着しました」、と国王に、上奏した。

１０月１０日、国王は閔妃の「干政」（政治介入）を非難する勅語を煥発し、閔妃を廃后にした。ただ、王世子の誠孝情理を慮って、嬪（側女）号を特別に賜与している。

翌０６年２月１３日、小村寿太郎（弁理公使）は西園寺（外相臨時代理）に次の様に報告した。

「（巡警ラ露公使館カラ朝鮮国王ガ発シタ捕縛令ヲ執行シテ金宏集総理、鄭秉夏農工商相ヲ）警務庁ニ拘致シタリ。警官ラハ金総理ヲ庁ノ門前ニ引キ出シタルニ人民猬集シテ立錐ノ余地ナシ。警官抜剣シテ金総理ヲ蹴倒シ、一刀ニシテ切リ下ゲ、ソノ後鄭農工商相ヲ同ジク斬殺ス。両屍に粗縄ヲカケテ鐘路（ソウル中心大街）ヲ引キ廻シタ。街上ニ充満セル負褓商ラガ屍体ニ大塊石ヲ投ジ、又ハ屍ヲ踏ミツケ、両屍体ハ原形ヲ留メヌ程ニ損壊シタ」[16]。

尚、魚允中・度支相も、他所で同様な運命を辿る事になった。

三浦梧楼公使は、９５年１０月１７日、本国に召還され、１１月５日に華族令第１５条第２項によって、華族の礼遇を剥奪された。

三浦公使は大院君クー・デターに１部関与したが、「乙未事件」における大院君の計画の「全貌」をサラサラ理解していなかったであろう。

三浦梧楼がそれを屈辱的に思い知らされるのは、１１月２７日に「春生門事件」が発生

した事によってであった。しかし、今迄歴史学では、同事件への注目が少なく、同事件を簡単に素通りするから、それ故、１００年以上の年月を経ても、「乙未事件」の「全体構造」が解明され得なかったのである。

「乙未事件」は、事件の「前半部分」に過ぎず、９５年１１月２７日夜半に起こった「春生門事件」（９６・２・１０「俄館播遷」も含む）という、その「後半部分」が、総合されないと、全体像にならない。そこで、「乙未事件」クー・デターの詳細の追跡を続行する前に、一旦時系列を飛び越すが、次に、我々は「春生門事件」の方を、先に分析する事にしたいのである。

９．結語　：回顧（２）—「春生門事件」から逆照射する「乙未事件」当日の王宮内

１８９５年１１月２６日、権栄鎮（内閣総署：内閣書記官長）、趙義淵（軍相）が突然解任された（ただし、同９５年１２月８日趙は再復活）(17)。又、他方、翌２７日（「春生門事件」の発生の前日）、李周会がソウルの自宅において突然逮捕された。禹範善（朴永孝派筆頭）、李斗璜、柳赫魯、鄭蘭教らが一斉に逃亡した。

「春生門事件」（１８９５・１１・２８）とは、朝鮮国王をアメリカ公使館（あるいは仏公使館）に遁入脱出させようと謀ったが未遂に終わってしまった事件である。翌９６年２月１０日に国王が決行した、歴史的一大事件である「俄（ロシア公使）館播遷」に、同「春生門」事件は先行して起こっている。

フート米公使が、ヴェーベル露代理公使を交えて、その原案を練ったのだった、と推測されている。尚、瓜２つの計画である後続「俄館播遷」は、李範晋（第３次金宏集内閣宮内協弁）と沈相薫（第３次金宏集内閣度支部大臣）が計画した、と推定されている。

先んずる「春生門事件」を実行したのは、玄興沢・侍衛隊連隊長（７・１９任：尚、訓錬隊連隊長へ洪啓薫も同日付けで任）、安駉寿・中枢院議官（朴定陽内閣度支部協弁、第３次金宏集内閣軍部大臣）であった。

李範晋、李允用、李完用、李夏栄、閔商鎬、李采淵（侍衛隊第１大隊長）、李学均（侍衛隊第２大隊長）らがこの２人に手を貸した。安駉寿が親衛隊（訓錬隊と侍衛隊を改組）の将校２人と、兵数十名を動員した。玄興沢はアメリカ公使館とのリエゾン役であろう。

「かつて」、といってもたかだか１年前の話だが、第１次金宏集内閣において、軍相・申萁善を支えていた大院君派の若手筆頭格が、安駉寿であった（その後安駉寿は閔氏派に寝返った）。大院君の計画に、安が再び従って朝鮮国王をアメリカ公使館かフランス公使館に脱出させようと謀ったものの、王宮警護に当たっていた「京城守備隊（日本軍）」に追い散らされた、というのが「春生門事件」の顛末であっただろう。

国際世論は、米露両国公使が関与した疑いが濃厚にあり、前代未聞の国王奪還未遂事件が発覚した事を批判したから、翌年１月に広島地裁で始まる「乙未事件」審理だけを米・露は糾弾する訳に行かなくなってしまった。

そもそも、大院君が立案したと推察される「乙未事件」（閔妃殺害事件）計画では、前

半は、閔妃をその生死を問わずに宮中から排除する計画であったが、その後に国王をアメリカ公使館（かフランス公使館）に「播遷」させるという「後半部分」も、予め準備されていた、と私は推測する。朝鮮国王も、又、三浦公使も、大院君の計画の、その「前半部分」だけしか知らされず、協力させられていた可能性が強い。

１００年以上も歳月を経ると、大院君の緻密な「乙未事件」クー・デターも、やむなく我々の前に全体像が浮き上がって来るが、それは年月の為せる技である。

大院君は閔妃を「捕獲」した後、朝鮮国王をアメリカ公使館（あるいは仏公使館）に翻遷させ（前述）、次に欧米列強国に「共同保護」を依頼し、朝鮮の「緩やかな保護国化」を実現しようと計画していたに違いない。ところが朝鮮国王の方は、あにはからんや大院君の「原案」を１部分「修正」（親米→親露）し、原案のアイデアを借用して、翌年２月に「俄館播遷」計画を決行したのであった、と解釈できよう。

「春生門事件」で捕縛されたのは、安駉寿、尹致昊（１２・４尹、逮捕。尹は前・外務協弁で朴定陽派）であった。９５年１２月２８日に高等裁判所の司法当局は、張博（法相）裁判長、権在衡（法部署理）最高検事というコンビが担当した。

ちなみに、張博は、第２次金宏集内閣で禹範善・訓錬隊第２大隊長と並んで大院君派の「閣外」纏め役を務めていたし、また権在衡は、朴定陽内閣（内閣総署：内閣書記官長）で、大院君派の「閣内」纏め役を務めていた。つまり、裁く方が大院君派、裁かれる方は閔氏派＋侍衛隊であった。

同計画の頭に担がれていた王族の李載純は免罪になり、翌９６年１月の「俄館播遷」後に、宮内府大臣に任じた。件の安駉寿が微罪（鞭打ち１００杖刑、懲役３年執行猶予１０年）で釈放されたのに比して、一方、あろうことか、李周会（大院君派→朴泳孝派？）が、前９５年１２月１７日、ソウル市中の自宅にいたところが、その場で逮捕され、その後そそくさと死刑に処された。

客観的に見れば、李周会の処刑によって、「乙未事件」の内幕すべてを知る最重要人物（大院君自身を除いて）が抹殺されてしまっている。同裁判では、同様にして、大院君派が、朴泳孝派（李周会）も裁いた。

「乙未クー・デター」のクライマックスの部分に戻り、この事「春生門事件」の顛末を我々が予め視野に入れて、ここから、歴史の後智恵を利用しつつ、賊の「乾寧閤」侵入時点に迄、時間の流れを巻き戻した上で、再吟味を試みて見よう。

９５年１０月８日午前７時頃、襲撃隊は朝鮮王宮の敷地の奥深く、乾清宮から長安堂（国王の寝所）、坤寧閤（閔妃の寝所）へ突進した。不法侵入者たちの前に立ち塞がる任務を本来与えられていた「侍衛隊」は、国王・高宗自身が平壌（ピョンヤン）宮で人集めを精力的に実施し、特に狙撃の名手ばかりを厳選徴発し編成した「虎の子」部隊であった。

ところが約６００人は城内警護任務中であった筈にもかかわらず、「侍衛隊」は申し訳程度に「訓錬隊」に「砲撃」らしきものを約２０分加えると雲散霧消した。大院君一行側の死者は「０」であった。白兵戦もほとんど起こらず、砲撃被害も無かった。

玄興沢・「侍衛隊」連隊長の影も、李采淵（第２次金宏集内閣・農商部協弁）・同第１大隊長の姿も現場から消えていた。「侍衛隊」側戦死者３名、負傷者１０数名の推計もあるがこの数字は信用出来ない。周辺を、本来「侍衛隊」指揮を執るべきジェネラル・ダイと、ロシア人のサバチン技師が、第３者を装ってうろつき回っていた。

大院君と高宗が１０月８日午前３時に「直接会見」を予約したという噂は、前７日夜半に宮廷内に普く知れ渡っていた。「**ウラジオストック売国請願書**」露見（９５・９・２８：前述）事件に関する閔妃の罪状を審議する、親（大院君）・子（高宗）「直接会見（直談判）」が実現しようとしていた。

７日、閔妃は、不安で堪らず、農商工部協弁兼内蔵院卿・鄭秉夏を７日の内に２度も日本公使館の三浦公使の下に連絡に走らせて、三浦公使に、「京城守備隊」を（王宮に）護衛出動してくれと懇請させた(18)。三浦公使は居留守を使った。もちろん閔妃は、ロシア公使館へは、その前にもっと足繁く人を走らせていたのに違いなかった。安駉寿軍相も、２日に辞職願いを出した挨拶を名分にして、同７日に、日本公使館に顔を数回覗かせ、中の様子を窺いに来ている。

岡本柳之助と楠瀬幸彦の２人は、帰国を臭わせて「訓錬隊」の幹部朝鮮人将校を引き連れ、漢城（ソウル）から仁川へ姿を消した。鄭秉夏が、８日の明け方頃長安堂から西大門外の銃声を耳聡く聴きつけて、国王と王世子に、「大丈夫でございます、国王様と王世子様のお身の上は安全でございますゾ」、と何度も注進に及んだ(19)。尚、「乙未事件」の「直後」に、鄭秉夏は「乙未事件」後、商工部大臣署理に昇格抜擢されたが、殺害される。

西大門外の銃声や康寧殿脇の砲声が早くから聞こえていたのに、我が身の上に危険が刻々と迫っていたにもかかわらず、閔妃は、自分の命より大事に思う王世子を手元から手放して（王世子は国王と長安殿にいた！）、坤寧閣（寝所）の中で２０～３０人の宮女たちの中に紛れ潜み、ひたすら震えてばかりでいた、といままでの歴史は解説する。

他方、この間に、安駉寿は、前夜７日から続く昇進祝賀パーティー（閔妃主催）の主賓であった閔泳駿を、安全に王宮外へ逃がした。ついでにいうと、自分自身も逃げおおせる。

無頼漢（襲撃者）たちが坤寧閣に踏み込んだ時に、室内に、宮内大臣の李耕植（閔妃の甥）がいた。李耕植は、侵入した賊徒が繰り出した刃の前に立ちはだかって斬り殺された。

「その場所にいた宮女を１人１人首実検した上、これは閔妃だと疑わしい、宮女服を身に纏った品格のある女性を１～２人殺害した」、という話を、賊徒たちは、後に広島地裁法廷の証言席で吐くのであった。同証言の信憑性を問う事はさておき、客観的に見れば、この、種々の、治外法権に守られた身の上での（発言によっても自分に重い責任が降りかかって来ない）証言は、大院君を（閔妃殺害の）「容疑者リスト」から外す、効果的な証言になっている。

ところが、このエピソード中で最も重要である点は、安駉寿の動向（前述）と別に、特進官・宮内府協弁・李範晋の姿が、その場にまったく登場して来ない事である。彼は何処に逃げたのだろうか？

だが、李範晋の名は意外な場所から出て来る。９６年２月１１日、その頃に国王の寵愛を一身に受けていた厳尚宮が手引きした「俄館播遷」に、その計画の中心的策謀者として、沈相薫と共に突然、李範晋の名は歴史の表舞台に出現するのである。

この事件の発生によって、閔妃派の若き特進官中のツー・トップである李範晋（宮内府協弁、農商工部大臣）、沈相薫（度支部大臣、内部大臣）が、閔泳駿の例（前述）と同様に安駟寿の手引きを受けて、「乙未事件」の城内から（多分、米国公使館へ）脱出した事実が我々に判明した。

２月１０日、即ち、「俄館播遷」の前日に、スペエル露公使は、仁川に停泊中の露軍艦から、１２０人の露・陸戦兵、砲１門、弾薬、食糧をソウル貞洞のロシア公使館内に運び入れた。

『フランクフルター・ツァイトゥング』９５年１２月３日付け記事は、ロシアとアメリカの公使が康清宮（謁見宮殿）に国王から呼び出しを受けたのは、８日午前６時頃であった、と伝えている。三浦公使もこれにほぼ前後して呼び出された。

ここで注意すべき点は、賊徒の閔妃襲撃は、この約１時間後、つまり８日午前７時頃に起きたという、時間的確定が同記事から可能になる事である。つまり、国王が、露米日３公使に面会し、我が身の安全を確信した「後」に、所謂「閔妃の寝所での暗殺事件？」が起こっているのである。

賊徒たち（内、容疑を受けた日本人４８人を指す）は事件後の１８日に、日本に慌てて連れ戻された。彼らは、広島第５師団軍法会議と広島地裁予審で、９６年１月１４日と２０日に裁判にかけられた。

三浦梧楼公使も、日本に戻されたが同裁判（９６・１広島地裁）で「推定無罪」になった。尚、楠瀬幸彦（中佐）・朝鮮国軍部顧問（兼公使館付武官）を始め、京城守備隊の日本人将校７人も同月、広島第５師団軍法会議の判決で推定無罪になった。

閔妃の行方の謎を解く鍵として、１８９５年１０月１８日付け『Times』記事が鍵になる。同記事は、１０月１３日に発布された国王の「閔妃廃后に関る詔勅」を、歴史上最も異常な公文書である、と報じた。国王はその前段で次の様に述べている。

「朕の統治はすでに３２年に及んでいる。閔家出身のわが王妃は王位の周辺に親類や味方を集め、朕の判断を曇らせ、国民から強奪し、朕の命令を乱し、官位を売り、また、地方であらゆる搾取を行った。朕が軍隊（訓錬隊？朝鮮官軍？）の解散を望んでいるとの虚偽の情報を閔妃は流した」。

ここ迄は、大院君の閔妃に対する評価を、国王が強制されたか？そのまま取り入れた論旨である。『Times』論評氏が訝しがる問題は後段であろう。そこで国王は次の様にいう。

「騒乱（大院君クー・デター）が起きると王妃は朕の身辺を離れ」、「捜索の及ばない

ところに身を隠した」。

朝鮮国王は、後半部分で、閔妃の居場所が今も確かめられないがしかしそれを探し出そうとする気持ちが一向自分に湧き起こらない、と朝鮮国民に率直に告白しているのである。

『Times』評論子が訝しがっているのは、国王が、閔妃が国王の指示を得ずに王宮から「勝手に離れ」た事を咎めて、それを以って閔妃を廃后に処する、と朝鮮国民に、閔妃「廃后」の正統理由を説明している箇所なのである。『Times』評論子の疑問は、例えば壬午事件の時にも閔妃は同じ様に行動したではないか？という事であろう。

国王が閔妃の死亡を「服喪」と称して公式に認めたのは、９５年１２月５日であった。その一方で、国王は、閔妃を「守護」すべき任務を負っていた安駉寿・軍相、玄興沢・「侍衛隊」連隊長等を、職務放棄・逃亡罪の罪名で処分しない事も、朝鮮国民に明示した。

朝鮮国王は、「最愛の閔妃」であっても、「**ウラジオストック売国請願書**」送達の例と同様、閔妃が又しても「**独断行動**」（国王を蔑ろにした罪）を犯し、それを自分はいよいよ許せない、と朝鮮国民に暗に言外に訴えたのである（この点で国王は大院君と同じ立場で手を結べる）。朝鮮内政史のこの文脈を外国人記者は分かりづらかったかも知れない。

その反面で朝鮮国王は、「売国奴」の汚名を閔妃１人だけに被せ押し付ける事によって、自分１人だけは「禊」（閔妃廃后処罰）が済んだ事を証し、「単独」治世形成へ向けて、巧みに朝鮮国民の信用を回復しようとした。

大院君は、翌９６年１月３０日、趙義淵を軍相に再任する人事で、大院君派が「（乙未）クー・デター」に完全勝利した事を朝鮮国内に大アピールした。大院君が、前９５年１０月１３日（「乙未事件」直後）に趙義淵を軍相に任命した事を、私は既に論じている。

しかし、９５年１０月には同一人事が、国王の不同意によって差し戻され、軍相が李道宰（日清戦争前の領議政〈総理〉：中立派）に変更されていた前史を、我々は想起しなければならない。９６年１月に、趙義淵が軍相に再就任すると、翌２月に、「俄館播遷」という劇的な対抗的政治手段を、国王が猛然と決断したのである。

さて、１８９５年１１月２日、仏『イリュストラシオン』誌にその写真の模写が掲載されて以来、これが閔妃の写真に間違い無い、と世に知られて来た１枚の写真がある。２００１年には金俊熙建国大学教授や李奉鎮・ソウル大学教授が、閔妃の肖像写真に間違いないと太鼓判を押した。ところが、実は、それは閔妃の顔写真ではなく、当時一般の写真店で、朝鮮宮女の衣装、髪型（クンモリ）を紹介する目的で販売されていた、観光土産用モデルが写ったポートレート写真の１枚であった。ただし、金文子はもう１枚別に写真があって、襲撃凶徒たちはそれを必ず携行していた筈だ、と主張している。だが、現在迄その写真は発掘されていない。

ただし、襲撃に参加した李周会だけは、鄭秉夏を通じて、閔妃を識別出来たと、今日なら推測が可能である。一方賊徒たちに最初から識別写真が渡っていないのであれば、凶徒たちは治外法権下の身分を利した、撹乱要員に動員されていたに過ぎなかったであろう。

他方、存廃未決のまま旧・朝鮮官軍（親軍：中清監司・朴済純指揮）は、「乙未事件」に一切登場する事が無かった。「（９５年）５・２１勅令」に計画された「新設軍」編成計画（「親衛軍」）— 旧６営１０，０００人を、新設隊５，０００人に改組（工兵、輜重兵、馬兵を含む）する — は、９５年１０月２日に安駉寿軍相（第３次金宏集内閣－閔氏派に寝返る）が辞表を出した事態から察すると、存廃保留状態のままであったと推測される。「乙未事件」の後になってから、申箕善－趙義淵ライン（親軍：旧・朝鮮官軍）から激しい抵抗に遭ったとしても、大院君は「親衛隊」を、「乙未事件」の『後』に、再編・再建した。この件によって、大院君の朝鮮国王に対する「軍事的優位」が一時的に決定した。

戻って、９５年「９・２９勅令」（「訓錬隊」の解散を指示）の真相は、実は第３次金宏集内閣宮内府大臣・李耕植（閔妃の甥）の副署（国王の主署無し）だけによって発布されていた。それは閔妃が「朝鮮国王の尊厳ある地位」を蔑ろにした重大証拠であった。

この如き閔妃の行動を、旧・朝鮮官軍（親軍 — 親衛軍の母体）なら、朝鮮国王への紛れも無い「不忠」が明らかであると考え、閔妃を朝鮮国家の「不倶戴天の敵」とみなしたと考えて良い。旧・朝鮮官軍（親軍）は１０月７日夜半に動静不明で「潜伏」した。

国王特別直隷の件の「侍衛隊」も、煙の如く、何処かへ姿をくらませたのであった。

仮りに逃走中の閔妃を親軍が王城の近辺か或いは地方で捕縛したとしたら（地方の警護は親軍〈地方軍〉の管轄であり、かつて壬午事件の時に地方を制圧していた駐屯清国軍は今や存在しない）、親軍は閔妃を、李周会・元軍部協弁〈或いは署理〉（第２次金宏集内閣：趙義淵軍相）グループ（朴泳孝派３人を暫定合作して含んだ６人である事を、判澤純太「朝鮮併合と英露関係」新潟工科大学『研究紀要』第１６号、２０１１年、６３頁に立証している）と諮（はか）って（ただし、趙義淵、申箕善が関与していたかどうか立証できない）暗殺（誅殺）処分に処したに違いなかろう。親軍が、①国王か、②大院君の一方に閔妃処分を委ねた場合、両者（①、②）間の政治バランスが失われ、「乙未クー・デター」決行の「前提」である暗黙の暫定「合作」構造が即座に崩れてしまい、閔氏戚族支配壊滅という、親軍のそもそもの最優先課題がまるで果せなくなってしまうからである。

しかしながら、「俄館播遷」（９６・２・１０）の後、(a) 大院君派と、(b) 朴泳孝派、両派の主たる政客は一斉に逃亡し、それから日本へ亡命しなければならなかった[20]。

この結末こそ、犬猿の仲の両グループ（a、b）が、①「乙未クー・デター」で結託したという驚くべき事実と、しかし、②そのクー・デター直「後」に、両グループ共に、朝鮮国王との利害対立の決定化を惹起させた事、の２つを証している。呉越同舟になるそのリストを以下に掲げよう。

李埈熔（大院君の孫：１８９６・７・１４亡命）、俞吉濬（内相：９６・６亡命）、張博（法相：９６・６亡命）、趙義淵（軍相：９６・２亡命）、禹範善（訓錬隊連隊長兼第２大隊長）、李斗璜（訓錬隊第１大隊長）、李軫鎬（訓錬隊第３大隊長、親衛隊第２大隊

長）、李範来（親衛隊第１大隊長）、趙義聞（趙義淵の従弟：訓錬隊将官）、権東鎮（権栄鎮・警務使の弟）、具然寿（農工商部主事）、鄭蘭教（朴泳孝派）、柳赫魯（金玉均派）、李圭完（朴泳孝派）、申応熙（朴永孝派）、黄鉄（農商工部副協弁：大院君の側近）。

注

（1）『日省録』李太王甲午年７月１５日。
（2）『近代朝鮮史研究』朝鮮総督府編、１９４４年、９６頁。
（3）『日韓外交史料』第９巻、原書房、１９８１年、５２頁、及び田保橋潔『近代日鮮史関係の研究』原書房、１９７９年、１８７頁。
（4）角田房子『閔妃暗殺』新潮社、１９８８年、２１８頁。
（5）１８９５年6月9日『東京朝日』
（3）『日本外交文書』２８－１、３６８頁。
（4）「自明治２７年１２月至明治３７年２月　日清講和後韓国駐屯帝国軍隊関係雑件」、金文子、『朝鮮王妃殺害と日本人』高文研、２００９年、１３３頁。
（5）防衛省防衛研究所図書館所蔵「明治２８年６月　２７，２８年戦役日誌」、金文子、５４頁。
（6）『駐韓日本公使館記録』（以下、『駐韓』と略称する）７－５２４頁。金文子、１２６頁。
（7）『駐韓』７－５２頁。金文子、同書、１２７頁。
（8）金文子、同書、１３７頁。
（9）陸軍省『明治２８年　蜜大日誌』。金文子、同書、１３６頁。
（１０）『日本外交文書』２８－１、２５３頁。
（１１）和田春樹『日露戦争』（上）、岩波書店、２０１０年、１８４頁。
（１２）菊池謙譲『大院君伝』閔妃２、第７巻、ペリカン社、３９０頁。
（１３）同上。
（１４）小松緑「朝鮮併合の裏面」『近代朝鮮論』第１０巻、李王朝、ぺりかん社、４９２頁。
（１５）河村一夫『日本外交史の諸問題』南窓社、１９８６年、１００頁。
（１６）「韓国皇族義和宮及同国人李浚熔並ニ亡命者帰国一件」外交史料館１・１・２－４１。
（１７）１１・２６小村公使→西園寺外相代理『韓国王妃殺害一件』第１巻、外交史料館５・３・２－１２。
（１８）菊池謙譲『大院君伝』閔妃２、第７巻、ぺりかん社、３９０頁。
（１９）同上。
（２０）「韓国皇族義和宮及同国人李浚熔並亡命者帰国一件」前掲史料。